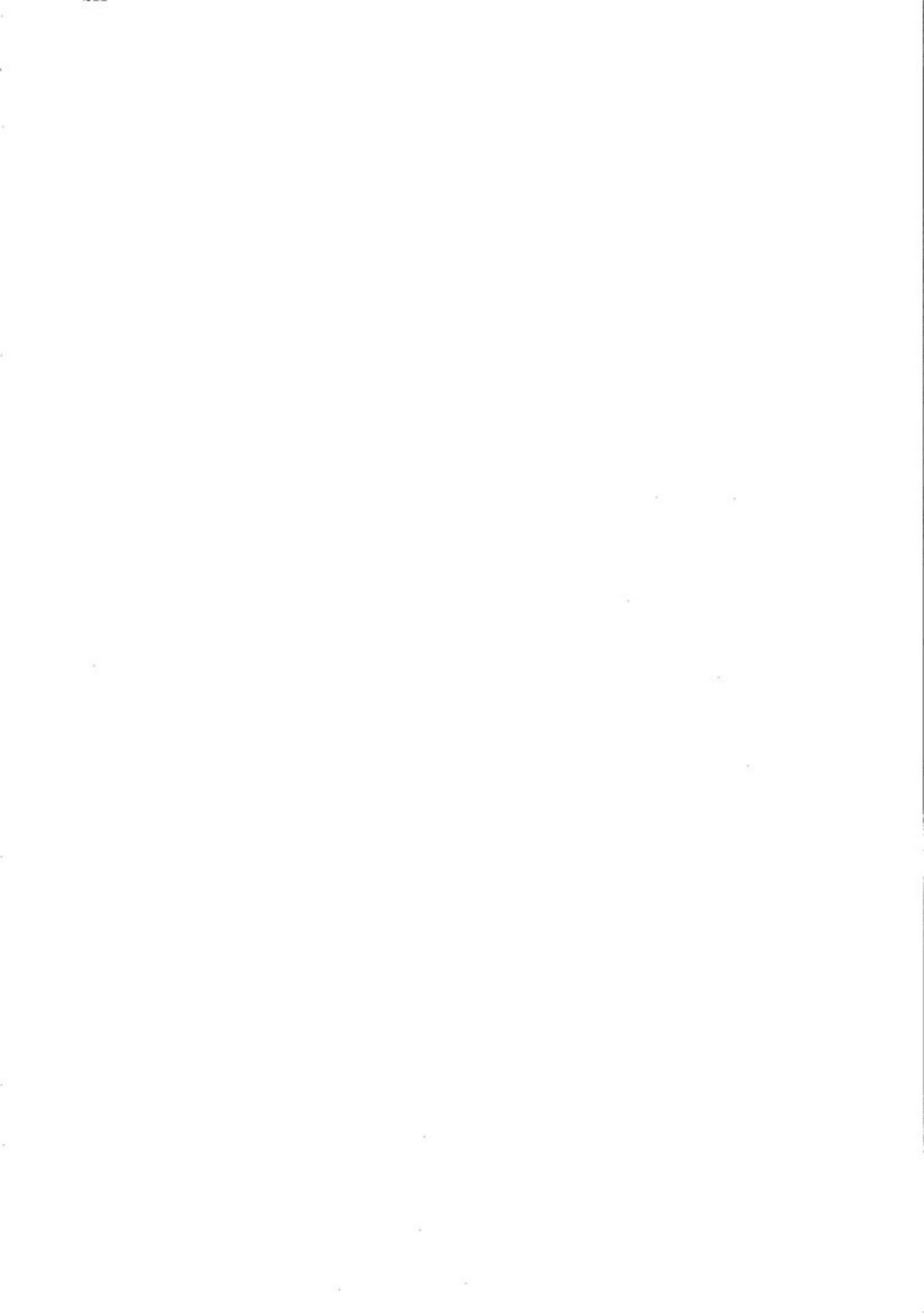


財團法人八尾市文化財調査研究会報告86

- I 跡部遺跡（第37次調査）
- II 跡部遺跡（第38次調査）
- III 跡部遺跡（第39次調査）
- IV 池島・福万寺遺跡（第3次調査）
- V 池島・福万寺遺跡（第4次調査）
- VI 池島・福万寺遺跡（第5次調査）
- VII 老原遺跡（第11次調査）
- VIII 恩智遺跡（第16次調査）
- IX 恩智遺跡（第17次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團法人八尾市文化財調査研究会報告86

- I 跡部遺跡（第37次調査）
- II 跡部遺跡（第38次調査）
- III 跡部遺跡（第39次調査）
- IV 池島・福万寺遺跡（第3次調査）
- V 池島・福万寺遺跡（第4次調査）
- VI 池島・福万寺遺跡（第5次調査）
- VII 老原遺跡（第11次調査）
- VIII 恩智遺跡（第16次調査）
- IX 恩智遺跡（第17次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあり、西に上町台地、東に生駒山系の景観をみる肥沃な土壤を有する地域であります。さらに、本市には恩智遺跡や八尾南遺跡をはじめ、古来より先人達が大地に刻んできた文化遺産が数多く残されています。しかし、その貴重な文化遺産が急激な都市化の進展によって、人目に触れることなく日々どこかで消滅しているのも周知の事実です。そこで我々財団法人八尾市文化財調査研究会は、調査・研究を通じて明らかとなった文化遺産を後世に伝えていくことが課せられた責務と考えています。

本書は、平成16年度および平成17年度に実施しました跡部遺跡(第37~39次)、池島・福万寺遺跡(第3~5次)、老原遺跡(第11次)、恩智遺跡(第16・17次)の9件の公共下水道事業に伴う調査成果を収録したものです。

本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護・普及の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の開始当初から本報告書の刊行にいたるまで、数々のご尽力を頂きました関係各位の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後尚一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 前田 義秋

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成16年度および平成17年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成17年12月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・II 楠口 薫、III・VII・IX 岡田清一、IV・VI 原田昌則、VIII 西村公助で、全体の構成・編集は岡田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成13年度版）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第VI系）を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。
土坑-SK
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
縄文土器・須恵器・陶器一黒、弥生土器・土器一白・瓦・木製品・石製品一斜線
1. 土色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

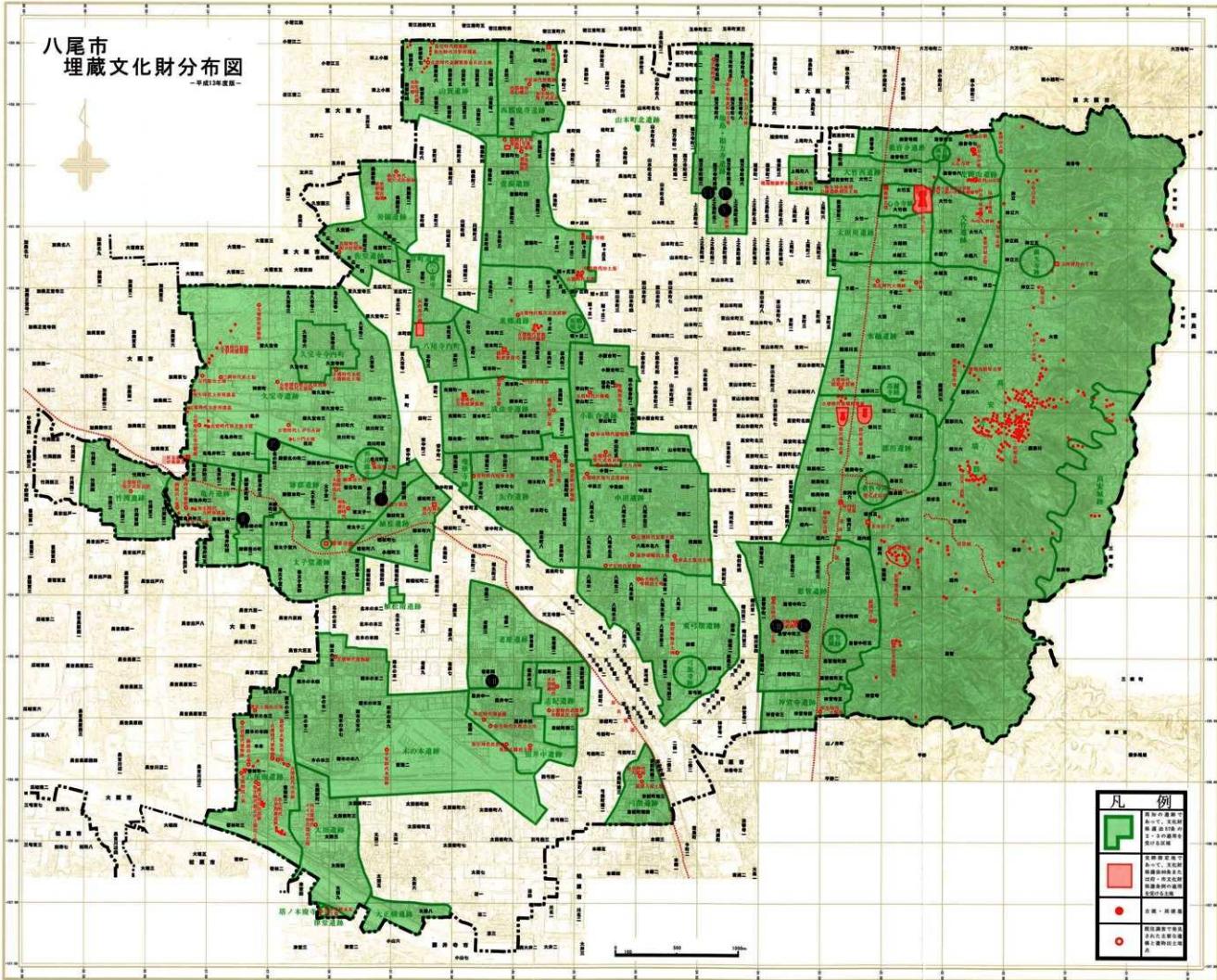
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 跡部遺跡	第37次調査 (A T 2004-37)	1
II 跡部遺跡	第38次調査 (A T 2004-38)	9
III 跡部遺跡	第39次調査 (A T 2005-39)	15
IV 池島・福万寺遺跡	第3次調査 (F K 2004-3)	21
V 池島・福万寺遺跡	第4次調査 (F K 2004-4)	29
VI 池島・福万寺遺跡	第5次調査 (F K 2004-5)	33
VII 老原遺跡	第11次調査 (O H 2005-11)	37
VIII 恩智遺跡	第16次調査 (O J 2005-16)	41
IX 恩智遺跡	第17次調査 (O J 2005-17)	47
報告書抄録		

八尾市
埋蔵文化財分布図

-平成13年度版-



I 跡部遺跡第37次調查（A T2004-37）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町2丁目地内で実施した公共下水道工事(平成15年度飛行場北排水区第113工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第37次(A.T.2004-37)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第127号 平成16年7月20日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年7月22日～9月30日(実働6日間)にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約18.25m²である。
1. 現地調査にあたっては、川村一吉、中村百合、村田知子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成17年2月28日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、図面トレースー市森千恵子、樋口、山名康子、本書の執筆・写真撮影及び編集ー樋口が担当した。

本 文 目 次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査方法と経過.....	2
2) 基本層序.....	3
3) 検出遺構と出土遺物.....	5
3.まとめ.....	5

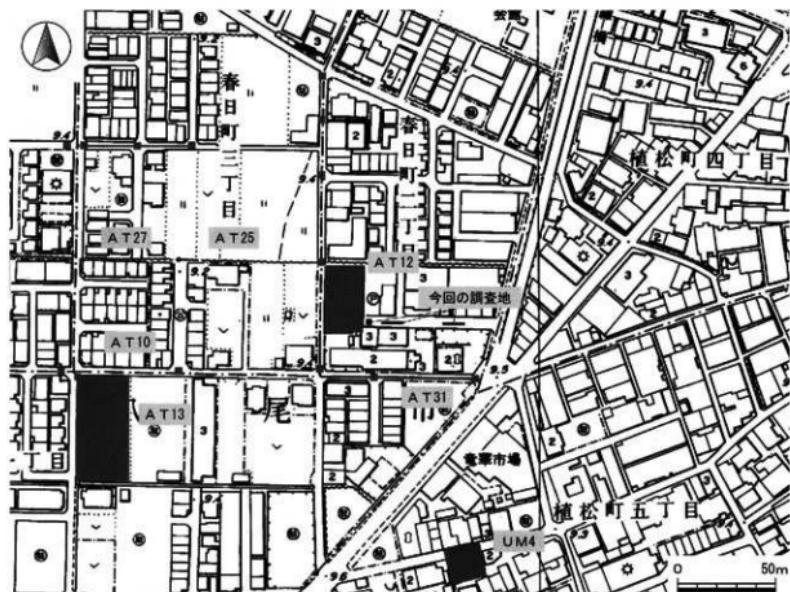
I 跡部遺跡第37次調査(AT2004-37)

1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、北から北西方向に分流する旧大和川の沖積作用により形成されてきた。今回報告する跡部遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の西部に位置する。現在の行政区画では、跡部本町1~4丁目、跡部南の町1・2丁目、跡部北の町1・2丁目、春日町1~4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目の東西約1.4km、南北0.5~1.0kmがその範囲と推定されている。

跡部遺跡は、昭和53年、春日町1丁目で行われた旧国鉄職員寮建設工事の際、弥生土器や鎌倉時代の瓦などが出土し、初めて遺跡の存在が確認された。以後、大阪府教育委員会をはじめ、八尾市教育委員会、当調査研究会による30次以上の発掘調査が実施されており、その結果、弥生時代前期～近世にかけての複合遺跡が重層的に展開していることが明らかになった。

跡部遺跡における特筆すべき成果のひとつに、平成元年度に当調査研究会が実施した第5次調査(AT89-5)が挙げられる。この調査は、銅鐸が出土したことで知られている。銅鐸は、推定



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)

表1 調査地一覧表(地図番号は第1図に対応)

※調査機関:八文研=(財)八尾市文化財調査研究会

地図番号	調査名(略号)	調査地番	調査面積(m ²)	調査期間	文献
A T 10	跡部第10次(AT92-10)	春日町3丁目	28	八文研	西村公助 1997「I跡部遺跡第10次調査(AT92-25)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 12	跡部第12次(AT93-12)	春日町2丁目35-1、35-2	245	八文研	坪田真一 1993「2. 跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 13	跡部第13次(AT93-13)	東太子堂1丁目16	348	八文研	坪田真一 1993「3. 跡部遺跡第13次調査(AT93-13)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 25	跡部第25次(AT97-25)	春日町2・3丁目	116	八文研	坪田真一 1999「I跡部遺跡第25次調査(AT97-25)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 27	跡部第27次(AT97-27)	春日町3・4丁目	20	八文研	坪田真一 1999「III跡部遺跡第27次調査(AT97-27)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 31	跡部第31次(AT99-31)	春日町2丁目・東太子堂1丁目	117	八文研	森本めぐみ 2001「I跡部遺跡第31次調査(AT99-31)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 37	跡部第37次(AT2004-37)	春日町2丁目	18.25	八文研	本書掲載
UM 4	UM第4次(UM95-4)	植松町3・5丁目	43.2	八文研	岡田清一 1999「I植松遺跡第4次調査(UM95-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告63』(財)八尾市文化財調査研究会

で一辺1.4mの隅丸方形の土坑内に粘土床を造り、その粘土床に鱗を突き刺し、横臥した状態で埋置、しかも銅鐸中軸線をあえて水平になるように設置していた。銅鐸は、扁平鉢式の全面・区流水紋銅鐸に分類されるもので、保存状態は極めて良好で、その法量は、全高46.65cm、鉢高13.65cm、鐸身平均高33cm、鱗を含む舞幅19.2cm、舞長径15.2cm、舞短径10.6cm、鱗を含む裾幅30.4cm、裾長径24.1cm、裾短径16.5cm、鐸身厚2.5~5mm、重量は4.7kgであった。銅鐸が造形された時期については不明である。一方、銅鐸の埋納時期については、埋納土坑内混入遺物や遺構の切り合い関係などから、弥生時代中期以降、古墳時代初頭以前を想定している。銅鐸出土地点が沖積地であったことや、銅鐸の埋納方法に特異性が認められるなどの成果は、当該期の銅鐸祭祀を考える上で一石を投じることとなった。

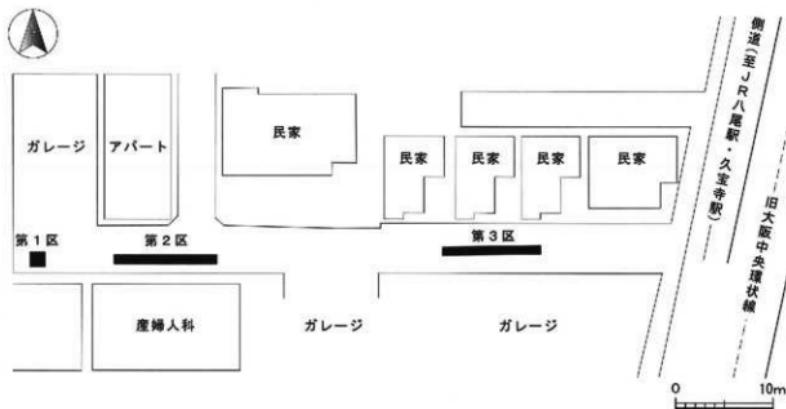
2. 調査概要

1) 調査方法と経過

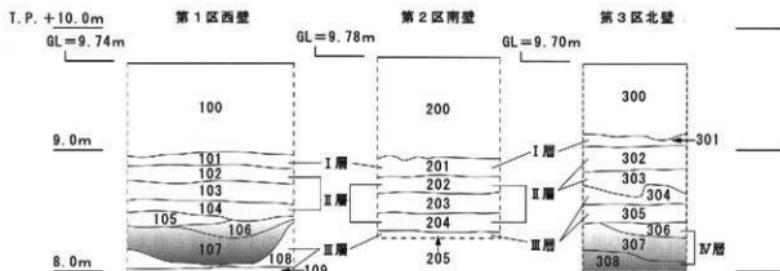
今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施する第37次調査にあたる。調査区は3箇所(西から第1~3区と呼称)である。調査は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第127号 平成16年7月20日)に基づきつつ、公共下水道工事の進捗状況を考慮しながら行われた。第1区は、平面規模約1.5×1.5m、面積約2.25m²の立坑部分を対象とするもので、現地表(T.P.+9.74m)下1.7m前後までを調査した。第2区は、平面規模約0.8m×10m、面積8m²の開削に伴うもので、現地表(T.P.+9.78m)下1.5m前後までを調査した。第3区は、第2区と同等の規模を有する開削部分の調査で、現地表(T.P.+9.70m)下1.7m前後までを調査した。いずれの調査も、機械と人力を併用して掘削を行い、遺構、遺物の検出に努めた。調査期間は、平成16年7月22日~9月30日(実働6日)である。

2) 基本層序

第1区 現地表下0.8m前後までは客土・盛土(100層)である。以下現地表下1.7m前後までの0.9m間で9層の地層を確認した。101層は暗灰色を帯びた粘土質シルト～シルトである。搅拌を著しく受け、グライ化の進行した地層である。旧耕土に比定される。102・103層はオリーブ灰色を呈した粘土質シルト～シルト。グライ化が目立つ。両層も水田耕作土の可能性が高い。104・105層はオリーブ灰色粘土質シルトで、雲状の酸化マンガンの沈着が認められる。106・107層は粘土質シルト～粗粒砂。水成層で、下方ではラミナ構造も見える。流路内堆積物であろう。108・109層は灰黄褐色～暗灰色を呈したシルト質粘土～粘土質シルトである。若干ではあるが細片遺物の混入が認められる。古墳時代初頭～中期の土壤化層と考えられる。



第2図 調査区位置図(S = 1/500)



第3図 地層断面模式図(S = 1/40)

表2 地層名一覧表

地層名	色調	粒度組成	堆積構造	検出遺構 出土遺物	備考
100	10YR7/3に近い黄褐色～7.5Y7/2灰白色	極粗粒砂～細繩（3～8cmの大ブロック）	ブロック	客土・盛土	現代の整地層
101	I N3/ 暗灰色	粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック	水田耕作土 (旧耕土)	グライ化
102	2.5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～シルト	ブロック		グライ化
103	II 2.5GY6/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～シルト	ブロック	水田耕作土	グライ化
104	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト（雲状酸化マンガンを含む）			グライ化
105	5GY6/1 オリーブ灰色	粘土質シルト（雲状酸化マンガンを含む）			グライ化
106	10YR6/2灰黄褐色	粘土質シルト～シルト（雲状酸化マンガンを極多く含む）			
107	10YR7/1灰白色～10YR3/2黒褐色	細粒砂～粗粒砂	ラミナ	流路内理土	
108	III 10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト（酸化マンガン斑・雲状酸化鉄分を含む）	土壤化層		
109	N3/ 暗灰色	シルト質粘土～粘土質シルト	土壤化層	遺物包含層	
200	10YR7/3に近い黄褐色～7.5Y7/2灰白色	極粗粒砂～細繩（3～8cmの大ブロック）	ブロック	客土・盛土	現代の整地層
201	I N3/ 暗灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック	水田耕作土 (旧耕土)	グライ化
202	2.5GY5/1 オリーブ灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック		グライ化
203	II 5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック	水田耕作土	グライ化
204	2.5GY6/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック		グライ化
205	III 5Y6/2灰オリーブ色	シルト（雲状酸化鉄分を多く含む）（2～3cmの大ブロック）	土壤化層	遺物包含層	
300	10YR7/3に近い黄褐色～7.5Y7/2灰白色	極粗粒砂～細繩（3～8cmの大ブロック）	ブロック	客土・盛土	現代の整地層
301	I N3/ 暗灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック	水田耕作土 (旧耕土)	グライ化
302	II 2.5GY4/1暗オリーブ灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック		グライ化
303	2.5GY5/1 オリーブ灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト～シルト（2～3cmの大ブロック）	ブロック	水田耕作土	グライ化
304	III 10YR4/1褐灰色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト（雲状酸化マンガンを多く含む）	土壤化層		
305	10YR4/2灰黄褐色	極粗粒砂～細繩混粘土質シルト（雲状酸化マンガンを多く含む）	土壤化層		
306	10YR4/2灰黄褐色	シルト			
307	IV 10YR5/2灰黄褐色	シルト～中粒砂		流路内理土	流路の西脇付近に位置する
308	10YR3/2黒褐色	シルト～極細粒砂（雲状酸化マンガンを極多く含む）			

第2区 現地表下0.8m前後までは客土・盛土(200層)である。以下現地表下1.5m前後までの0.7m間で5層の地層を確認した。201層は暗灰色の粘土質シルト～シルトで、グライ化が顕著である。旧耕作土に相当する。202～204層はオリーブ灰色を帯びた粘土質シルト～シルトである。これらの地層も水田耕作土の可能性が高い。205層は灰オリーブ色を呈したシルトである。若干ではあるが細片遺物の混入が認められる。古墳時代初頭～中期の土壤化層と考えられる。

第3区 現地表下0.6m前後までは客土・盛土(300層)である。以下現地表下1.7m前後までの1.1m間で8層の地層を確認した。301層は、101、201層同様の旧耕作土に相当する。302・303層

は暗オリーブ灰色～オリーブ灰色を呈した粘土質シルト～シルト。両層もグライ化が認められ、この内303層では鈍溝のような地層の乱れが見える。水田耕作土か、304・305層は褐灰色～灰黃褐色の粘土質シルト。土壤化層である。306～308層はシルト～中粒砂で構成された水成層。流路内埋土であろう。本調査区東側に推定される流路の西肩付近に堆積した地層の可能性が高い。

3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構の検出はなかった。遺物は、地層内に混入した碎片が数点出土したが、いずれも図化するには至らなかった。

3.まとめ

今回の調査は、各調査区が僅少であったことから、平面的に遺構を検出することは困難な状況であった。しかしながら地層観察では、本調査地周辺において遺構の存在を肯定しうる成果を得ることができた。以下では、第1～3区の地層の対応関係を整理し、その後、周辺で実施された既往の成果との対比を行い、各地層の形成年代を推測、最後に、本調査地とその周辺における各時代の遺構の分布状況について検討を加え、今後の調査における指標にしたい。

(1) 地層の整理

まず、第1～3区の地層の対応関係を整理する。

【I層】 各調査区ともにT.P.+9.0m前後において、暗灰色を呈したグライ化の顯著な搅拌層を確認している。これらは旧耕作土に相当する。形成時期は、客土・盛土が成される直前のものであるため、限りなく現代に近い時期の地層である。

【II層】 I層の下層には、各調査区ともに概ね2～4層のグライ化層(第1区：102～105層 第2区：202～204層 第3区：302・303層)が続く。これらも水田耕作により形成された搅拌層と考えてよい。時期不明。

【III層】 II層の下層には、黄褐色～灰黃褐色を呈した土壤化層(第1区：108・109層 第2区：205層 第3区：304・305層)が認められる。この土壤化層には、弥生～古墳時代の遺物細片が混在(第1・2区で確認)しており、形成時期を推測する上で重要視される。なお、第1区では、このIII層を基盤層とした可能性の高い流路を確認した。この流路は、106・107層が相当する。

【IV層】 III層の下層については、不明な点が多いが、第3区では、306～308層の水成層の存在を確認した。これらの地層は西から東に向かって傾斜するラミナ層である。したがって、これらの地層を形成した流路は、第3区よりも東に想定することが可能である。事実、第3区の東を南北に走る旧大阪中央環状線のところでは、湧水の著しい砂礫層が確認されており、この推測を肯定している。時期不明。

(2) 既往調査との比較

次に、周辺で実施された既往調査の成果との対応関係を見てみよう。今回、比較対象とした調査地は、本調査地に西隣する地点で実施された第12次調査地と、本調査地の南約30mの地点で実施の第31次調査地3～6区である。

【第12次調査地】 T.P.+8.9～9.1m付近で旧耕土を検出しており、【I層】と符合する。以下、青灰黄色系砂質土と黄灰色系砂質土が続く。両層についての詳細は不明であるが、本調査区との対

応関係では【II層】に比定される。その下には第9層といった暗黄褐色系粘土～粘質土が認められる。この地層はブロックで形成されているよう、古墳時代初頭～中期に形成された盛土層の可能性が考えられる。【III層】が対応するであろう。またここでは、この盛土を基盤層とした流路を検出(第5～8層が相当)している。この流路は、本調査地第1区で確認の流路(106・107層)につながる可能性が高い。なお、この盛土層や流路の上面では、古墳時代後期の溝や、奈良時代と推定される掘立柱建物を検出している。一方、第9層土壤化層より下層については、ここでは引き続き3層の土壤化層が存在する。下から順に弥生時代前期、中期、後期の遺構の基盤層になり、前期では上坑・溝・落ち込み・小穴を、中期では土器棺墓を、後期では土器集積などを数多く検出している。

【第31次調査地】客土・盛土以下T.P.+8.4m前後までの地層については、不明な点が多い。しかし、地層の色調や粒度組成などを見ると、概ね【I・II層】が形成されていたと考えてよい。ここでは、T.P.+8.3～8.4m付近において、広範囲に土壤化層の存在が確認されている。この土壤化層は、本調査地や第12次調査地でも確認の土壤化層に相当する【III層】であろう。西端に位置する3区では、この土壤化層の下層にさらに土壤化層が存在する。このような状況は、第12次調査地で検出した、弥生前期～後期の土壤化層のあり方に類似する。一方、もっとも東に位置する6区では、【III層】土壤化層直下に砂礫層が存在する。この砂礫層はラミナ構造が顕著な水成層で、本層第3区で確認した【IV層】に相当する。その他に、この調査地では、本来の基盤層は不明であるが、時期が確定できる遺構が検出されている。4区検出の井戸S E 401(7世紀後半)と、5区検出の土坑(S K501)や土器溜(S W501)(それぞれ6世紀末～7世紀初頭)が該当する。これらの遺構の推測される基盤層であるが、調査担当者によると、SK501とSW501は、506層(【III層】土壤化層に比定の506層下層に形成された地層)の上面と考えているようだ。ただし、先述のように第12次調査における地層堆積状況などから判断すると、506層上面もしくはこの地層より上面に基盤層の存在を想定すべきではなかろうか。

(3) 地層の形成時期について

以上を踏まえた上で、各地層の形成年代について整理する。

【I層】現代に形成された地層である。

【II層】後述するように、本層は古墳時代後期～奈良時代の遺構を覆う地層である。したがって、平安時代～近世にかけて形成された地層と想定しておきたい。

【III層】第12次調査で確認された第9層が、古墳時代初頭～中期に形成された盛土層であることから、この時期をもって、本層の形成時期とする。

【IV層】直接時期を決定すべき要素は見当たらない。ただし、対応関係として、第12次調査地や第31次調査地で検出された弥生時代前期～後期の土壤化層が考えられることから、概ねこの時期を比定しておく。

(4) 本調査地周辺における遺構の分布

以上、本調査地周辺における地層の対応関係を整理してみた。概ねI～IV層の4層に分類でき、それぞれの地層の形成年代も推測できた。最後に、それぞれの時期の遺構が、今回取り上げた3調査地のどの辺りに分布するのかを検討してみる。対象範囲は本調査地を中心とした、東西約100m、南北約60mとする。

【弥生時代前期～後期】 この時期の地層は、【IV層】が比定される。【IV層】の分布を見ると、本調査地における第3区や、第31次調査地5・6区に限られる。つまり、対象範囲の中央～東方に偏っていることが分かる。一方同時に比定される土壌化層の分布については、本調査地第1区をはじめ、第12次調査地、第31次調査地3・4区などの、西端に偏っているといえる。土壌化層における遺構の検出状況は、第12次調査地では濃厚であることから、当該期も居住域(前期・後期)や墓域(中期)の中心と見なしてもよいのではないか。その場合、居住域あるいは墓域の東限は、【IV層】水成層の分布するところまでと考えてよい。

【古墳時代初頭～中期】 この時期の地層は、【III層】が相当する。【III層】の分布は、対象範囲全域に認められる。つまり、この時期は、前代まで流路であった箇所(IV層部分)も生活面に変化したことを意味する。しかしながら、遺構・遺物の検出状況は希薄であり、やはりその中心は前代同様、対象範囲の西端に偏った傾向にあるようだ。遺構の性格としては、第12次調査地において、検出された盛土層が、墓であった可能性が考えられることから、墓域の存在を推測しておく。

【古墳時代後期～奈良時代】 【III層上面～II層内】を基盤層とする遺構群で、その分布は、第12次調査地や第31次調査地3・4区と、やはり対象範囲の西端に偏っているようだ。遺構の性格としては、第12次調査地の掘立柱建物や第31次調査地4区の井戸(S E 401)が挙げられる。居住域を構成する遺構群と推測される。

【平安時代～近世】 【II層】が想定される。対象範囲では、当該期の遺構は検出されていない。また、地層を見る限りでは、搅拌の著しい水田耕作土の様相を呈することから、当該期には、生産域に変貌を遂げた可能性が高い。

【現代】 【I層】が比定される。対象範囲一帯に広く分布する現代の水田耕作土である。前代から引き続き生産域として機能していたのである。

以上、地層の整理を行い、各時代の遺構分布範囲を推測した。点的な調査から得られた情報を元に行った考察であるため、不安定さは否めない。しかしながら、同時代の地層の広がりを確認し、各時代の遺構の検出範囲が限定できたなど、一定の成果を得ることはできたと思われる。今後、こうした地層の整理、遺構の分布範囲の検討が、市内各地で行われることを期待したい。

参考文献

- ・安井良三他 1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－(財)八尾市文化財調査研究会報告31』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1994「2. 跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森木めぐみ 2001「I 跡部遺跡第31次調査(AT99-31)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告67」(財)八尾市文化財調査研究会



第1区 西壁断面
(T.P. +8.0~9.7m)



第2区
南壁断面 (T.P. +8.2~9.0m)



調査地周辺状況 (東から)

II 跡部遺跡第38次調査（A T 2004-38）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市跡部南の町1丁目地内で実施した公共下水道工事(平成16年度飛行場北排水区第32工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第38次(A.T.2004-38)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第165号 平成16年9月1日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年11月16日～平成17年2月18日(実働5日間)にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約36m²である。
1. 現地調査にあたっては、伊藤静江、加藤邦枝、川村一吉、中村百合の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年2月18日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、図面トレース市森千恵子、山名康子、本書の執筆・写真撮影及び編集－樋口が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	9
2.調査概要.....	10
1) 調査方法と経過.....	10
2) 基本層序.....	10
3) 検出遺構と出土遺物.....	10
3.まとめ.....	11

II 跡部遺跡第38次調査(AT2004-38)

1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、北から北西方向に分流する旧大和川の沖積作用により形成されてきた。今回報告する跡部遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の西部に位置する。現在の行政区画では、跡部本町1~4丁目、跡部南の町1・2丁目、跡部北の町1・2丁目、春日町1~4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目の東西1.4km、南北0.5~1.0kmがその範囲と推定されている。

跡部遺跡は、昭和53年、春日町1丁目で行われた旧国鉄職員寮建設工事の際、弥生土器や鎌倉時代の瓦などが出土し、初めて遺跡の存在が確認された。以後、大阪府教育委員会をはじめ、八尾市教育委員会や当調査研究会による30次を超える発掘調査が実施されており、その結果、弥生時代前期～近世にかけての複合遺跡が重層的に展開していることが明らかになった。特に弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が、遺跡の東部を中心に多く検出されており、この付近を核として当該期の集落が展開していたと認識されている。

今回報告を行う第38次調査地は、跡部遺跡の南西端に位置し、周辺では、北60~80m地点で3次、南西100~160mで3次の調査が実施されている。この内、もっとも北に位置する跡部遺跡第8次調査地では、奈良時代の居住域の中核を成した可能性の高い井戸を検出した。またもっとも南西に位置する亀井遺跡第1・2次調査地では弥生時代中期中葉比定の土器棺墓や溝を、また弥生時代後期の祭祀に関連すると推測される遺構群を検出した。一方、上記以外の調査では、厚く堆積した砂礫層を確認しており、各時代を通して概ね河道域であった可能性が推測されている。



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)

表1 調査地一覧表(地図番号は第1図に対応)

※調査機関:八文研=(財)八尾市文化財調査研究会

地図番号	調査名(略号)	調査地番	調査面積(m ²)	調査機関	文献
A T 8	跡部第8次(AT92-8)	跡部本町4丁目4-20	100	八文研	岡田清一 1993「II 跡部遺跡第8次調査(AT92-8)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 30	跡部第30次(AT98-30)	跡部本町4丁目	31.2	八文研	森本めぐみ 2000「III 跡部遺跡第30次調査(AT98-30)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
A T 38	跡部第38次(AT2004-38)	跡部南の町1丁目	36	八文研	本書掲載
KM 1	龜井第1次(KM88-1)	南龜井町4丁目41-1	220	八文研	近江俊秀・岡田清一・並河聰也 1989「龜井遺跡 - 南龜井町4丁目41-1の調査 - 」『(財)八尾市文化財調査研究会
KM 2	龜井第2次(KM89-2)	南龜井町1丁目39-2・6・40-2	200	八文研	成海佳子 1990「10. 龜井遺跡(KM89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28。(財)八尾市文化財調査研究会
KM12	龜井第12次(KM2001-12)	南龜井町1・4丁目	7.5	八文研	植口 嘉・金義満 2002「II 龜井遺跡第12次調査(KM2001-12)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会
KM13	龜井第13次(KM2002-13)	南龜井町1・3丁目	56.03	八文研	植口 嘉 2003「IX 龜井遺跡第13次調査(KM2002-13)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
KM14	龜井第4次(KM2002-4)	南龜井町1~4丁目、跡部本町4丁目、跡部南の町1丁目	64	八文研	高萩千秋・岡田清一・植口 嘉 2004「II 龜井遺跡第14次調査(KM2002-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究公が跡部遺跡内で実施する第38次調査にあたる。調査区は1箇所(平面規模約6.4×5.6m、面積約36m²)である。調査は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第165号 平成16年9月1日)に基づき、現地表(T.P.+9.78m)下4.5m前後まで機械と人力を併用して掘削を行い、遺構、遺物の検出に努めた。調査期間は、平成16年11月16日～平成17年2月18日(実働5日)である。

2) 基本層序

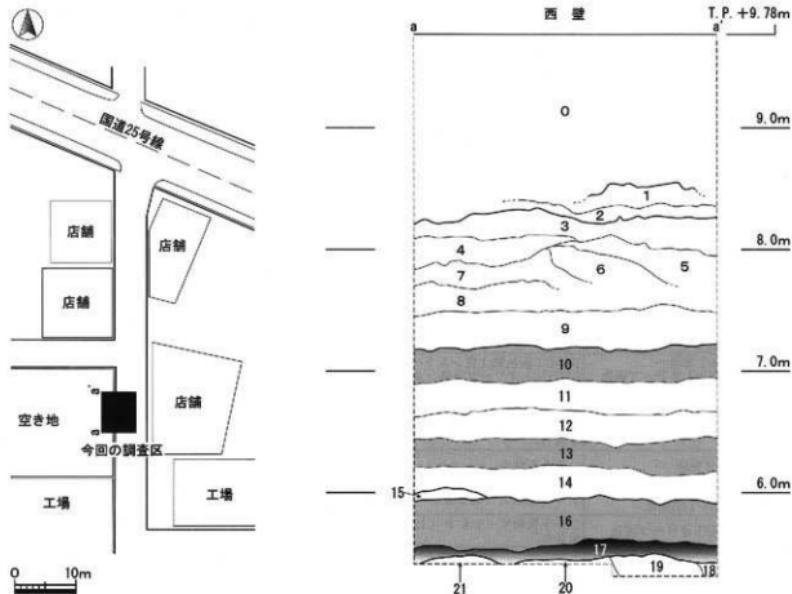
現地表下1.2m前後までは客土・盛土(0層)で充填される。以下現地表下4.5m前後までの3.3m間で21層の地層を確認した。1・2層はグライ化が顕著で、攪拌を著しく受けた粘土質シルト～シルトである。水田耕作土の可能性が高い。3～9層は南から北に下る斜交ラミナ構造が発達した砂疊層である。流路内埋土である。10～14層はシルト質粘土～シルトである。湿地性の堆積物で、炭化物や植物遺体がラミナ状に介在する。15層はラミナ構造をもつシルト～細粒砂。シート状に薄く堆積した地層で、溢流堆積物と推測される。16層は灰色シルト質粘土。炭化物をラミナ状に含む湿地性の堆積物である。17層は中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト。上位は土壤化が進行している。下位に統く18～21層の土壤化部分に相当する。

18～21層はシルト～細粒砂疊層で構成された水成層。流路内埋土である。

3) 検出遺構と出土遺物

遺構の検出はなし。出土遺物は、6～8層砂疊内より須恵器杯蓋の天井部～II縁端部細片(1)が出土した。口縁端 第2図 6～8層内出土遺物(S=1/4)





第3図 調査区位置図(S=1/800)・地層断面図(S=縦:1/40 横:1/100)

部は下方に拡張を行い、端部外面にはほぼ垂下する凹面が形成されるもので、天井部上位外面の回転ヘラケズリ以外はすべて回転ナデを行う。色調は灰白色(5Y7/1)を帯び、若干酸化焼成氣味である。胎土は精緻。8世紀前半に属するものと推測される。

3.まとめ

今回の調査では、概ね厚く堆積する水成層を確認した。同様の堆積状況は、本調査地周辺に位置する跡部遺跡西部や亀井遺跡東部で行われた調査の成果(跡部遺跡第30次調査、亀井遺跡第12・13・14次第1区調査)でも確認された。この内、亀井遺跡第12・13次調査では、弥生時代中期以降に比定の水成層を観察し、亀井遺跡第1・2次調査地で検出した当該期遺構群が東方には広がらないことを予測した(樋口・金親2002、樋口2003)。一方、奈良時代の居住域の一端を検出した跡部遺跡第8次調査地に南接する地点で実施の、跡部遺跡第30次調査や亀井遺跡第14次第1区調査でも砂礫層が見え、奈良時代以前は第8次調査地より西側が河道であったと考えてよい。

本調査において確認した水成層が、上記の調査で見られた水成層と一連のものであるならば、本調査地周辺では、概ね弥生時代中期以降は河道であった可能性が高く、その範囲は、本調査地を中心とした跡部遺跡と亀井遺跡の境界付近一帯の東西幅150~180mを下回ることはないと推測される。今後、周辺で調査が行われる際にはこの河道の存在に注目したい。

表2 地層名一覧表

地層名	色調	粒度組成	堆積構造	棲出構造	出土遺物他
0	10YR3/1 黒褐色	極粗粒砂～細粒砂 (3~10cm大のブロック)	ブロック	客土・盛土	現代の整地層
1	10G5/1 緑灰色	シルト質粘土～粘土質シルト (雲状化マングンを少量含む)	ブロック	水田耕作上	グライ化
2	25GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～極粗粒砂 (5~10cm大ブロック) (南方では雲状化マングンを多く含む)	ブロック		グライ化
3	10Y4/1 灰色～ 25GY4/1 喀オリーブ灰色	10Y4/1 灰色シルト質粘土～25GY4/1 喀オリーブ灰色細粒砂	斜交ラミナ	流路内壁土	
4	10Y4/1 灰色～ 25GY5/1 オリーブ灰色	10Y4/1 灰色粘土質シルト～25GY5/1 オリーブ灰色シルト	斜交ラミナ		
5	5Y5/1 灰色	細粒砂～中粒砂	斜交ラミナ	筑堤器 (1) 出土	
6	10Y5/1 灰色	中粒砂	斜交ラミナ		
7	5Y4/1 灰色	粘土質シルト～極粗粒砂	斜交ラミナ	流路内壁土	
8	5Y5/1 灰色～ 5GY5/1 オリーブ灰色	細粒砂～細粒砂	斜交ラミナ		
9	10Y4/1 灰色～ 25GY5/1 オリーブ灰色	10Y4/1 灰色粘土質シルト～25GY5/1 オリーブ灰色シルト	水平ラミナ	湿地性堆積物	
10	25Y3/1 黒褐色	シルト質粘土～粘土質シルト (炭化物・植物遺体ラミナあり) (炭酸カルシウムを含む)	水平ラミナ		暗色帶
11	25GY4/1 喀オリーブ灰色	シルト質粘土～粘土質シルト (炭酸カルシウムを含む)			グライ化
12	5Y4/1 灰色	シルト質粘土		暗色帶	
13	25Y3/1 黒褐色～ 10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土 (植物遺体・炭化物を含む)			
14	5GY5/1 オリーブ灰色	シルト質粘土～シルト (上方に炭酸カルシウムを含む)	水平ラミナ	溢流堆積物	
15	25GY5/1 オリーブ灰色	シルト～細粒砂	水平ラミナ		
16	10Y4/1 灰色	シルト質粘土 (炭化物・炭酸カルシウムラミナ)	水平ラミナ	湿地性堆積物	暗色帶
17	10Y5/1 灰色～ 25GY4/1 喀オリーブ灰色	中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	土壤化		
18	5GY5/1 オリーブ灰色	シルト		流路内壁土	
19	25GY6/1 オリーブ灰色	粗粒砂～極粗粒砂			
20	10G5/1 緑灰色	シルト		流路内壁土	
21	10Y5/1 灰色	極粗粒砂～細粒砂			

<参考文献>

- 近江俊秀・岡田清一・並河聰也 1989『龜井遺跡－南龜井町4丁目41-1の調査』(財)八尾市文化財調査研究会
- 成海佳子 1990「10. 龜井遺跡(KM89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
- 岡田清一 1993「II 跡部遺跡第8次調査(A T92-8)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
- 森本めぐみ 2000「III 跡部遺跡第30次調査(A T98-30)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
- 樋口 薫・金親満夫 2002「II 龜井遺跡第12次調査(KM2001-12)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会
- 樋口 薫 2003「IX 龜井遺跡第13次調査(KM2001-13)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋・岡田清一・樋口 薫 2004「II 龜井遺跡第14次調査(KM2003-14)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会

南壁断面
(T.P.+6.2~7.7m: 北東から)



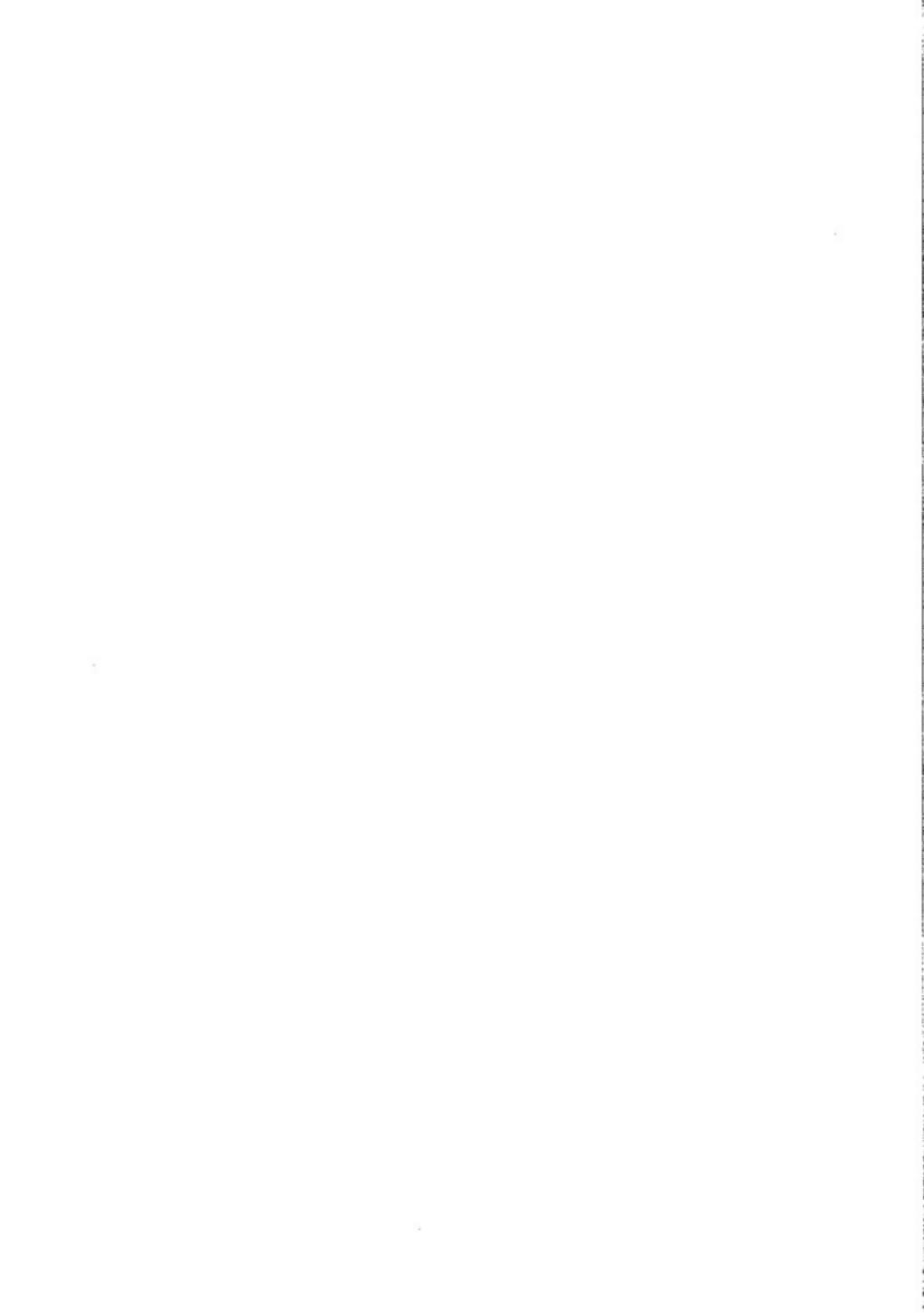
南壁断面
(T.P.+5.3~6.2m: 南東から)



調査地周辺状況 (南東から)



S D101出土遺物①



III 跡部遺跡第39次調査（A T2005-39）

例 言

1. 本書は大阪府八尾市春日町2丁目地内で実施した公共下水道工事(16-31工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第39次調査(A T 2005-39)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第376号 平成17年3月24日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年5月25日～5月30日(実働4日)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約23m²を測る。なお、調査においては都築聰子・徳谷尚子・中村百合(五十音順)が参加した。
1. 内業整理は現地調査後に着手し、平成17年8月12日に終了した。
1. 本書の図面トレースおよび執筆・編集はすべて岡田が行った。

本 文 目 次

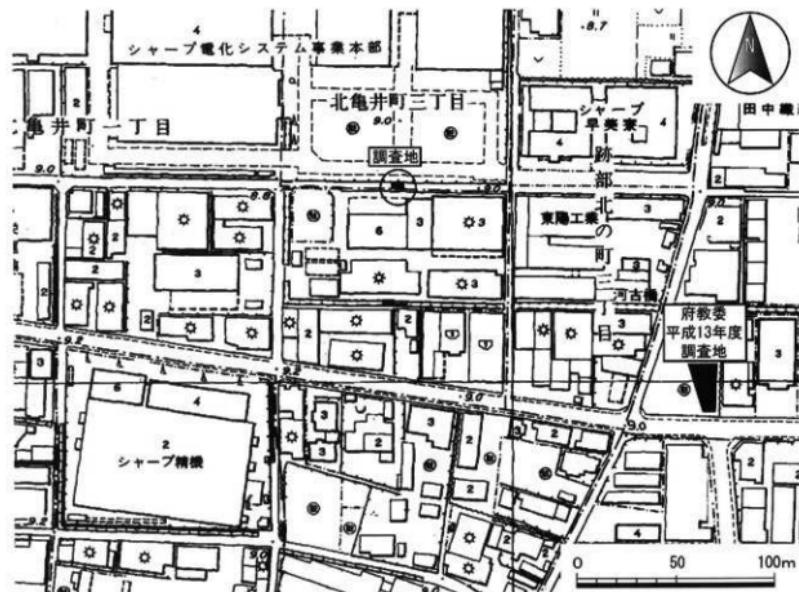
1. はじめに.....	15
2. 調査概要.....	16
1) 調査の方法と経過.....	16
2) 基本層序.....	16
3) 検出遺構と出土遺物.....	17
3. まとめ.....	19

III 跡部遺跡第39次調査(A T 2005-39)

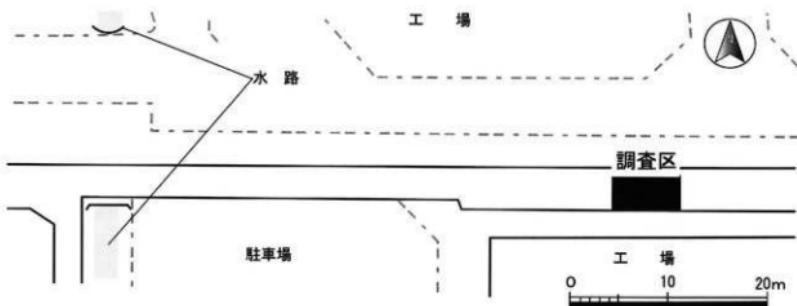
1. はじめに

跡部遺跡は、八尾市西部に位置する弥生時代以降からの複合遺跡である。地理的には、旧大和川の主流であった北部の長瀬川と南部の平野川によって形成された自然堤防上に立地する。行政区画上は、跡部本町1~4丁目、跡部北の町1~3丁目、跡部南の町1・2丁目、春日町1~4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目の東西約1.4km・南北約1.0kmの範囲に位置する。当遺跡の周辺には、北に久宝寺遺跡、西に亀井遺跡、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡が隣接しており、北東には飛鳥時代の創建と伝えられる「渋川廃寺」の推定地が位置している。

当遺跡は、昭和53年の春日町1丁目における旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の壺や鎌倉時代の瓦片が出土したことで認知された。その後、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当研究会によって3次におよぶ発掘調査が実施され、弥生時代～中世にかけて連続と数多くの遺構・遺物が検出されるようになった。そのなかで特筆すべき成果としては、今回の調査地から東へ約500mの地点で発見された銅鐸が挙げられる。この調査は平成元年に公共下水道工事に伴って実施されたもので、銅鐸は古墳時代初頭以前に埋納されたことが判明し、その状況から当地点



第1図 調査地位置および周辺図 (S=1/2500)



第2図 調査区位置図 ($S=1/500$)

は当該期の居住域の縁辺部にあたるものと考えられた。今回の調査地近隣では、南東約170m地点で平成13年に大阪府教育委員会によって実施された府道久宝寺太田線建設工事に伴う調査がある。この調査では、弥生時代後期に比定される自然流路、奈良・平安時代の溝・足跡、中世・近世以降の井戸・溝といった遺構と各時代の遺物が検出された。これらの結果、当地においては平安時代初頭前後以降、現代まで耕作地として土地利用されたことが明らかとなった。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事に伴うもので、当研究会が跡部遺跡内で実施する第39次調査にあたる。調査対象は発進立坑部分にあたる東西7.2m×南北3.2mの面積約23m²の規模を有する。掘削深度は工事がおよぶ現地表(T.P.+約8.2m)から約4.5m迄である。掘削は、現地表から約0.5mの既存の道路築造に伴う盛土を重機によって排除した後、以下の地層を重機・人力併用で工事対象深度まで進め、遺構・遺物の検出に努めた。

2) 基本層序

既述の盛土(第0層)を除き、全体で11層(第1~11層)の堆積層を確認した。以下、各地層について記述する。

第1層：5GY4/1暗緑灰色シルト。近現代の耕作土である。層厚0.2~0.4m。近世の陶磁器片が僅かに含まれる。

第2層：10YR7/6明黄褐色シルト。層厚0.2~0.3m。酸化鉄分が少量含まれる。本層以下、第4層までは近辺の既往の調査から層位的に平安時代~中世に比定される。

第3層：10YR6/1褐灰色粘土質シルト。層厚0.4m前後。管状の酸化鉄の斑紋が多く認められる。

第4層：N3/0暗灰色シルト。層厚0.4~0.5m。粘性がやや強く、部分的に搅拌を受けたような粘土質シルトがブロックで混入する。

第5層：2.5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.2~0.4m。本層の上面(T.P.+6.2m前後)においてSK1を検出した。

第6層：5PB5/1青灰色シルト質粘土。層厚0.3~0.6m。粘性が強く、未分解の植物遺体を部分的

に含む。本層については近辺の既往の調査から、層位的に古墳時代に比定される。

第7層：N4/0灰色砂礫混じりシルト。層厚0.2m前後。3~5mmの礫を多く含む。ラミナ状の植物遺体が認められる。

第8層：N8/0灰白色細粒砂。層厚0.4m前後。河川の氾濫に起因する堆積層と思われる。本層については近辺の既往の調査から、層位的には弥生時代前期以前に推定される。

第9層：10BG4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚0.4~0.5m。シルト優勢で、下部にはラミナ状の植物遺体が認められる。

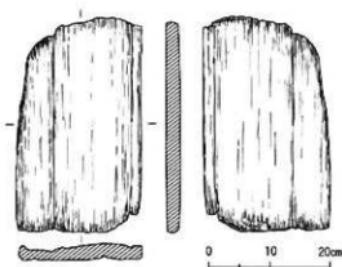
第10層：N7/0灰白色細粒砂。層厚0.3m前後。下層の第11層を切ってブロック状に入り込む。1~3mmの礫を多量に含む。河川の氾濫に起因する堆積層と考えられる。

第11層：10BG4/1暗青灰色~5G4/1暗緑灰色粘土質シルト。上部にはラミナ状を呈する植物遺体が認められた。層厚0.7m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

調査区南部中央付近の第5層上面において、土坑1基(S K 1)を検出した。遺構の掘方北部については掘削中に削平してしまったため全容は不明であるが、推定復元で南北約80cm・東西約50cm、深さについては断面観察の結果、60cm前後を測るものである。埋土は黒褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は底部から、長辺34cm・短辺21cm・厚さ1.8cmを測る木製の板材が1点(第5図)出土した。この板材はやや水平な状態で出土したことから柱に伴う礎板とも思われたが、埋土の断面には柱根およびその痕跡は確認されず、板材の上面にも柱の接触痕は認められなかつた。形状および加工の様子からも用途は見出せなかつた。遺物はこの板材のみで、本遺構の帰属年代を示す土器類等は皆無である。既述の東方で実施された大阪府教育委員会の調査および北方の久宝寺遺跡調査の成果と照合すると、層位的には平安時代以降が推定される。

他に遺構および遺物は検出できなかつたが、第2~4層にかけては平安時代~中世に至る耕作土を示唆する状況がみられた。



第5図 SK 1 出土用途不明木製品実測図 (S=1/8)

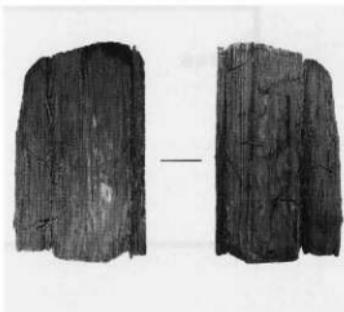
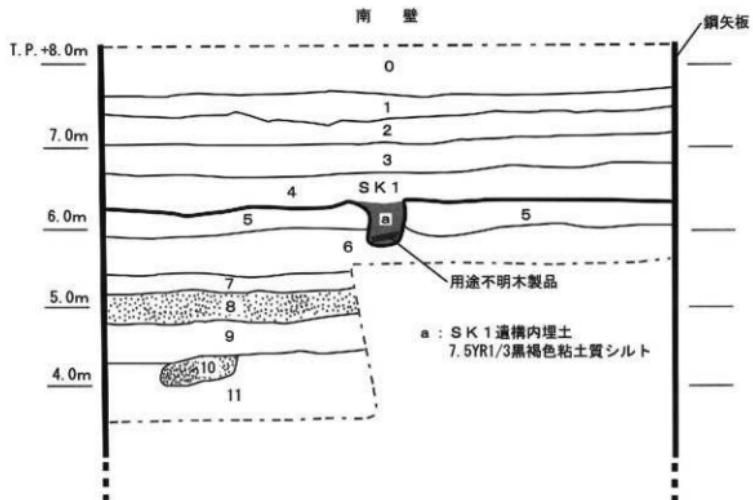


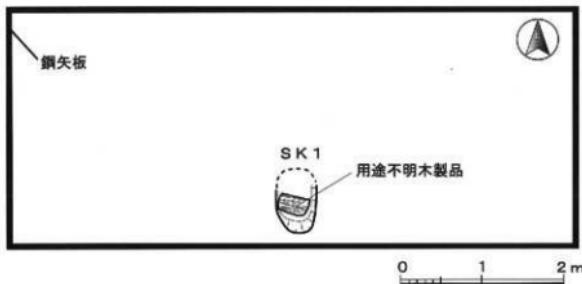
写真1 SK 1 出土用途不明木製品



第0層：盛土
 第1層：5GY4/1暗緑灰色シルト
 第2層：10YR7/6明黄褐色シルト
 第3層：10YR6/1褐灰色粘土質シルト
 第4層：N3/0暗灰色シルト
 第5層：2.5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト

第6層：5PB5/1青灰色シルト質粘土
 第7層：N4/0灰色砂礫混じりシルト
 第8層：N8/0灰白色細粒砂
 第9層：10BG4/1暗青灰色粘土質シルト
 第10層：N7/0灰白色細粒砂
 第11層：10BG4/1暗青灰色～5G4/1暗緑灰色粘土質シルト

第3図 南壁面図 ($S=1/60$)



第4図 遺構平面図 ($S=1/60$)

3.まとめ

今回の調査では、遺構として平安時代以降と考えられる土坑1基(SK1)のみの検出で、それ以外の遺構・遺物は検出されなかった。各地層についてもおおむねフラットな状況で、遺構面を示唆する人為的な掘り込みや起伏は認められなかった。当地周辺においては現在のところ、八尾市教育委員会による小規模な遺構確認調査が実施されているが、弥生時代～近世まで希少な遺物は検出されているものの、特に顕著な遺構は見つかっておらず、当地点で第6層以下にあたる古墳時代以前は、どちらかというと人の営みが見られない湿地帯を呈した土地であったことが想定される。既述の南東部で実施された大阪府教育委員会の調査においても弥生時代後期以降の遺構・遺物が検出されているが、すべて希薄な状況で、生活の場としての兆しがみえるのは平安時代初頭前後で、それは居住地としてではなく、耕作地に伴う排水溝の検出から生産域の準備段階であることが考察されている。今回検出した遺構(SK1)が、その耕地化と有機的に関連するものかどうかは不明であるが、その上層にあたる第2～4層の地層の様子からは少なくとも平安時代以降現代までの期間、生産域として土地利用されてきたことが窺える。

参考文献

- ・安井良三他 1991『跡部遺跡発掘調査報告 一大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸一(財)八尾市文化財調査研究会報告31』 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・小林義孝 2002『跡部遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告2001-6



調査地（西から）



SK 1 検出状況（北から）



北壁面（T.P.+6.5~7.5m付近）



同上



北壁面（T.P.+3.5~5.0m付近）



人力掘削状況（北西から）



完掘状況（北西から）



実測風景（北西から）

IV 池島・福万寺遺跡第3次調査(FK2004-3)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市上之島北町3丁目、福万寺南町4丁目地内で実施した公共下水道工事(16-13工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する池島・福万寺遺跡第3次調査(FK2004-3)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第192号 平成16年10月5日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年11月4日～平成16年12月9日(実働6日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約24m²を測る。
現地調査においては、市森千恵子・岩本順子・鈴木裕治・細谷利美・實樹婦美子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成17年3月18日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤静江、図面トレー－ス－山内千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

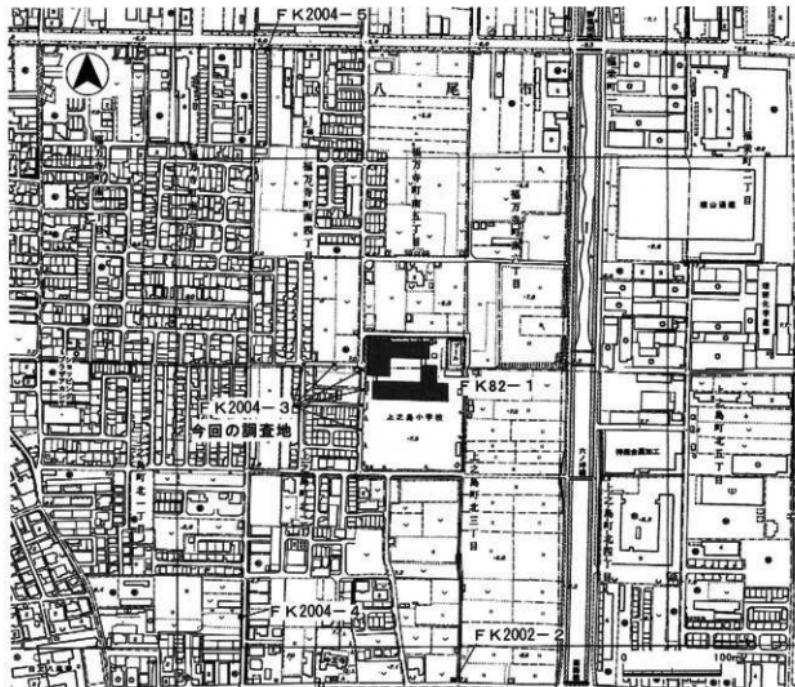
1.はじめに.....	21
2.調査概要.....	22
1)調査の方法と経過.....	22
2)基本層序.....	23
3)検出遺構と出土遺物.....	23
3.まとめ.....	25

IV 池島・福万寺遺跡第3次調査(FK2004-3)

1. はじめに

池島・福万寺遺跡は、大阪府八尾市北東部の福万寺町から東大阪市南東部の池島町にかけての東西1.2km、南北1.7kmに広がる弥生時代前期から近世に至る複合遺跡である。地理的には、旧大和川の分流である玉串川右岸と恩智川沿いに形成された三角州帯自然堤防および後背湿地に立地している。

遺跡北部の池島地区は、河内郡の条里地割が良好に残存する「池島条里遺構」として周知されていた。考古学的な調査は1972年の東大阪市遺跡保護調査会による府立池島高校予定地内の調査を嚆矢とし、1977~80年代に実施された府営水道管理設工事に伴う調査等で縄文時代~近・現代に至る遺構・遺物が検出されている。1984年以降においては、池島・福万寺地区において府の総合的な治水対策の一環として総面積40.2ha、貯溜量165万m³を測る恩智川治水緑地建設が計画され、それに伴う発掘調査が現在も継続して(財)大阪府文化財センターにより実施されている。そ



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

これらの調査成果を総合すれば、弥生時代前期～現代までの各時代の耕作遺構面および古墳時代の集落の存在等が明らかにされている。

一方、八尾市が実施した発掘調査としては、1982年に八尾市上之島町3丁目22-1で当調査研究会が実施した八尾市立上之島小学校建設に伴う第1次調査(FK82-1)が嚆矢である。調査では、東西方向に伸びる道路を挟んで展開する鎌倉時代前半～末期(13世紀前半～14世紀前半)の屋敷跡が検出されている。この屋敷跡は、溝で区画された区画内に比較的大きい建物を南北軸に配置している他、園地と思われる遺構の存在や、硯、中国産磁器、鉄製武器等の金属製品が出土しており、土豪ならびに武士化した有力名主階層の居住地であったことが推定される。当遺跡一帯は河内郡に位置し、鎌倉時代には「玉櫛莊」と呼ばれていた。「玉櫛莊」は当初、摂関家領であったが、京都宇治の平等院創建とともに平等院に施入されており、平等院の運営に深く関わった荘園と考えられる。遺跡東方の八尾市大竹にある向山瓦窯は平等院・醍醐寺などの寺院に屋瓦を供給したことが知られており、「玉櫛莊」の荘園を介在として「河内系軒瓦」の流通が展開されていたことが想定される。

今回の調査地は当遺跡内で実施した第3次調査(FK2004-3)にあたり、第1次調査地(FK82-1)の西に近接している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市上之島町北3丁目、福万寺町南4丁目地内で行われた公共下水道工事(16-13工区)に伴うもので、当調査研究会が池島・福万寺遺跡内で実施した第3次調査(FK2004-3)にあたる。調査は人孔構築部分の6箇所(1区～6区)で面積は約24m²を測る。調査では八尾市上之島町北3丁目で実施した4箇所の調査区を北から1区～4区、福万寺町南4丁目で実施した2箇所の調査区を西から5区・6区と呼称した。各調査区の規模は約2m四方である。調査方法としては、現地表から2m前後までを重機と人力を併用して調査を行う予定であったが、現地表下1.1m以下に厚く堆積する洪水砂層部分の壁面崩壊と多大な湧水のため面的な調査を



第2図 調査地位置図 (S=1/100)

断念して、地層堆積状況に重点をおいた調査を行った。

2) 基本層序

〔1区～4区〕

1区～4区は、南北方向に伸びる道路上に設定した調査区である。8層(第0～7層)を抽出して基本層序とした。第0層は層厚64～80cmを測る近年の客土層である。第1層が客土以前の水田作土層で、第3～6層が河川氾濫に起因した洪水砂層である。第7層は粘土質シルトが優勢な層相で、5・6区で検出した第5層に対応する。

第0層：客土。層厚64～80cm。上面の標高はT.P.+7.1m前後。

第1層：N3/0暗灰色砂質シルト。層厚10～18cm。旧作土上。

第2層：10GY6/1緑灰色砂質シルト。層厚10～20cm。細粒砂が混じる。

第3層：2.5GY8/1灰白色極細粒砂～細粒砂。層厚15～55cm。

第4層：5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂。層厚10～25cm。

第5層：N8/0灰白色細粒砂。層厚20～43cm。マンガン斑が認められる。

第6層：N7/0灰白色砂質シルト。層厚16cm。細粒砂が混じる。

第7層：7.5GY8/1明緑灰色粘土質シルト。層厚25cm以上。

〔5区・6区〕

5区・6区は、東西方向に伸びる道路上に設定した調査区である。6区については、鋼矢板が打設されていたことから、湧水が少なく現地表下2.7mまでの地層が観察できた。8層(第0～7層)を抽出して基本層序とした。1～4区と同様、旧作土以下に層厚80～115cmを測る洪水砂層(第2～4層)が観察される。6区では第5層から鎌倉時代後期の土師器小皿、須恵器壺等の小片が極少量出土している。

第0層：客土。層厚50～80cm。上面の標高はT.P.+7.0m前後。

第1層：N3/0暗灰色砂シルト。層厚15～35cm。旧作土上。

第2層：7.5GY6/1緑灰色細粒砂～中粒砂。層厚15～35cm。

第3層：N6/0灰白色極細粒砂～細粒砂。層厚33～55cm。

第4層：N5/0灰白色シルト質粘土。層厚20～30cm。炭酸鉄の顆粒が認められる。

第5層：N4/0灰白色粘土質シルト。層厚25cm。鎌倉時代の遺物を含む。

第6層：10YR3/1黒褐色シルト質粘土。層厚37cm。植物遺体を含む。

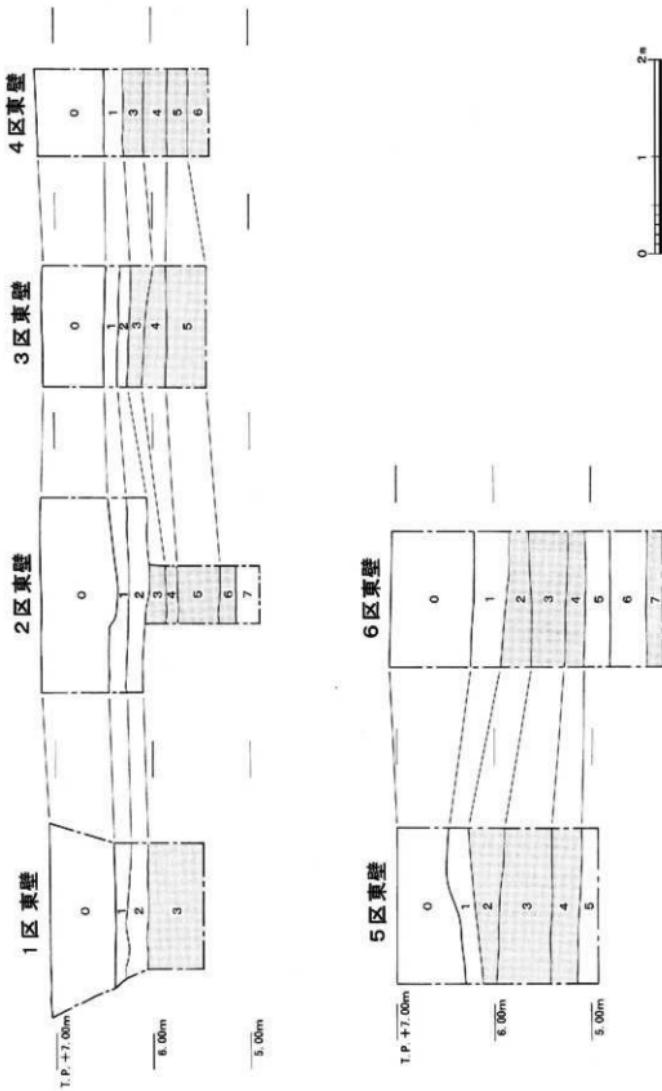
第7層：10GY7/1明緑灰色極細粒砂。層厚17cm以上。

3) 検出構造と出土遺物

6区の第5層から土師器、須恵器等の小片が極少量出土している。土師器小皿2点(1・2)を図化した。共に口縁部の残存率が1/12程度の小片である。復元口径は1が7.8cm、2が9.3cmを測る。外面は体部と口縁部の境に強いヨコナデにより明瞭な段を形成するので、口縁部は逆「く」の字状に小さく屈曲し、尖り気味で終わる口縁端部に至る。色調は淡褐灰色。鎌倉時代後期(13世紀後半～14世紀初頭)に比定される。



第3図 6区5層出土
土遺物実測図



第4図 1~6区断面図 ($S=1/50$)

3.まとめ

今回の調査は、人孔構築部分を対象とした小面積の調査で、しかも洪水砂層の存在やそれらに起因した多大な湧水のため、壁面観察を対象とした調査に限定されたが、6区においては、現地表下2.8mまでの堆積地層の観察ができた。全調査区で検出した約1mにおよぶ河川氾濫を起因とする洪水砂層については、東接する第1次調査(FK82-1)でも全面に亘って検出されており、第1次調査地の造構廃絶の成因となったものと考えられる。第1次調査では、和泉型瓦器碗の最終段階の瓦器碗(尾上編年のIV-4)以降に洪水砂層の堆積が認められることから、鎌倉時代末期(14世紀前半)頃に調査地一帯を埋め尽くす大規模な河川氾濫があったものと推定される。また、6区では第1次調査に対応する鎌倉時代の遺物を含む(第5層)を確認しており、集落域がさらに西部に広がることが確認できた。

参考文献

- ・東大阪市遺跡保護調査会 1973「池島町の条里造構－調査概報－」
- ・東大阪市遺跡保護調査会 1975「池島町の条里造構－48年度・49年度発掘調査概報－」
- ・大野 嘉 1982「池島遺跡試掘調査概要・I」大阪府教育委員会
- ・杉本 宏 1993「平等院山瓦の新相－河内系郡瓦の様相・年代・背景－」「平安京歴史研究－杉山信三先生米寿記念論集－」杉山信三先生米寿記念論集刊行会
- ・米田敏幸他 1990「福万寺遺跡－上之島町北3丁目22-1の調査－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」「藤澤一夫先生古稀記念論集 古文化論集」藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- ・森島康雄 1992「畿内産瓦器碗の併行関係と層年代」『大和の中世土器II』人和古中近研究会



1区 東壁（西から）



2区 東壁（西から）



3区 東壁（西から）



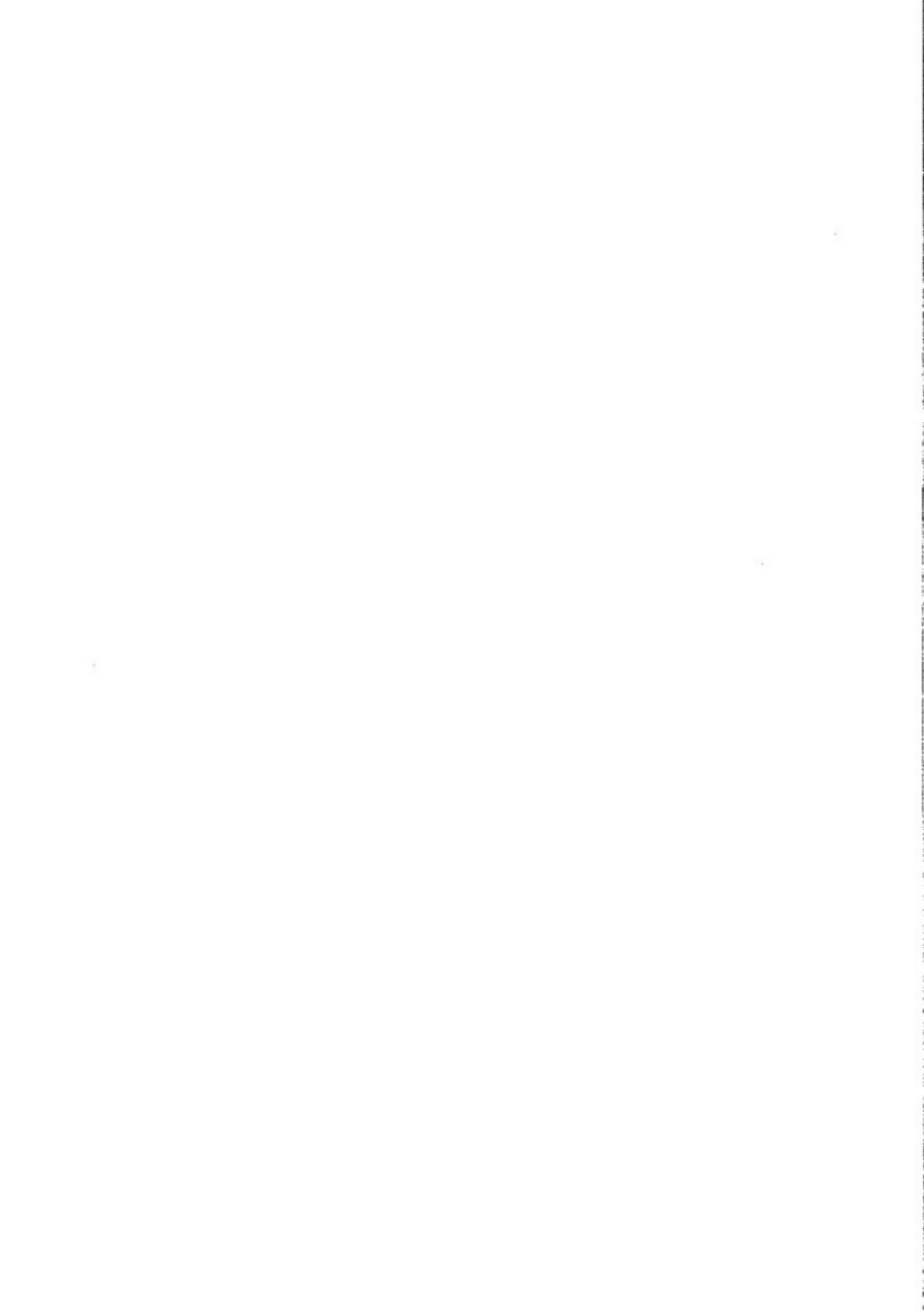
4区 東壁(西から)



5区 東壁(西から)



6区 東壁(西から)



V 池島・福万寺遺跡第4次調査（F K2004-4）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市上之島町北2丁目地内で実施した公共下水道工事(16-14工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する池島・福万寺遺跡第4次調査(FK2004-4)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第209号 平成16年10月27日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年1月7日～平成17年1月11日(実働2日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約45.6m²を測る。
1. 現地調査においては、飯塚直世・細谷利美が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成17年3月18日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー山内千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	29
2. 調査概要.....	29
1) 調査方法と経過.....	29
2) 基本層序.....	30
3.まとめ.....	31

V 池島・福万寺遺跡第4次調査(FK2004-4)

1. はじめに

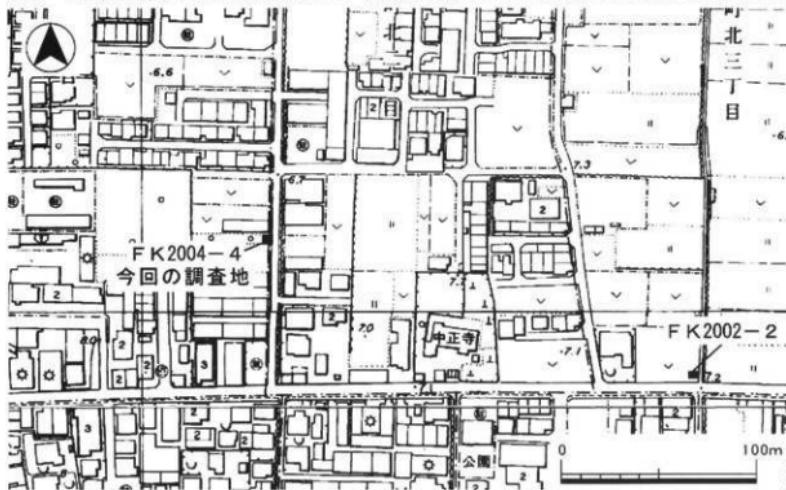
今回の発掘調査は、大阪府八尾市上之島町北2丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が池島・福万寺遺跡内で実施した第4次調査(FK2004-4)にあたる。調査地点は、大阪府八尾市北東部の福万寺町から東大阪市南東部の池島町にかけての東西1.2km、南北1.7kmに広がる、池島・福万寺遺跡の南端部にあたる。調査地点の北東約260mでは、昭和57年に第1次調査(FK82-1)、南東約210m地点では平成15年に第2次調査(FK2002-2)を実施しており、第1次調査では鎌倉時代前半～末期(13世紀前半～14世紀前半)において、屋敷地を構成したと想定される遺構・遺物が検出されている。地理・歴史的環境についてでは、本書IVの「1.はじめに」を参照のこと。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市上之島町北2丁目地内で行われた公共下水道工事(16-14工区)に伴うものである。調査は立坑部分の1箇所で、東西幅6.0m、南北幅7.6m、面積は約45.6m²を測る。

当初、現地表下2.2m(T.P.+7.45m)まで機械掘削の後、0.3m前後の人力掘削を予定していたが、平成17年1月7日に業者から連絡を受け現地に赴いた時点で、既に機械掘削が2.5mに及んでいた。そのため、機械掘削の中止指導および口頭で厳重注意を行うとともに、文化財課・下水道課への経過報告と今後の調査方法について協議した。このような状況であったため、調査では、



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

機械掘削が完了していた現地表下約2.5m(T.P.+4.9m)以下の1.7mについて機械・人力掘削を併用して、地層堆積状況に主眼をおいた壁面調査を実施した。東壁面で地層の観察を行ったが、矢板打設時の工法に影響され、壁面の崩壊が相次ぎ、結果的に幅約3.2mのみが調査対象となった。

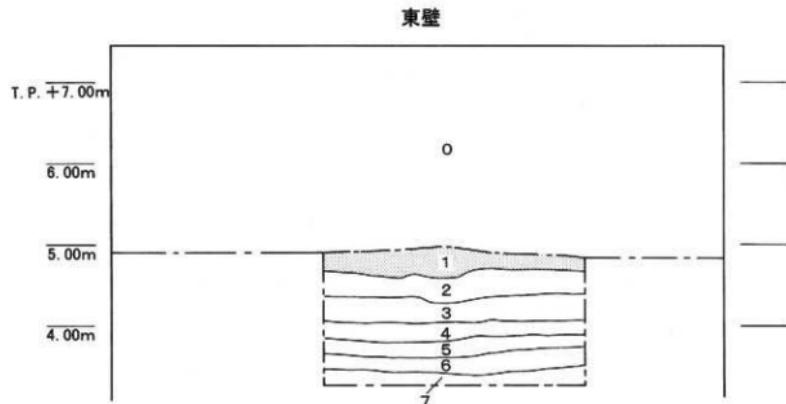
2) 基本層序

現地表下2.5~4.2m(T.P.+4.9~3.2m)の間で、7層(第1~7層)を確認した。第1層は中粒砂~極粗粒砂が優勢な河川堆積層である。標高からみて、当調査地の北東約250mで行った八尾市立上之島小学校建設に伴う第1次調査(FK82-1)で検出された、鎌倉時代前期~末期(13世紀前半~14世紀前半)の集落を廃絶させた成因とされる洪水砂層に対応する可能性がある。第2層は層中に炭酸鉄の顆粒が散見されるもので、葦等の抽水植物が繁茂する閉塞された静水域の自然環境であったことが想定される。第3層~第7層は粘土~粘土質シルトが優勢な湿地性の堆積物で構成されている。

- 第1層:N6/0灰色中粒砂~極粗粒砂。層厚40cm以上。上部に中疊を含む河川堆積層。
- 第2層:5Y5/1灰色シルト質粘土。層厚30cm。炭酸鉄の顆粒が散見される。
- 第3層:5Y6/1灰色シルト質粘土。層厚30cm。
- 第4層:7.5GY6/1緑灰色粘土。層厚15~25cm。粘性強い。
- 第5層:2.5Y6/1黄灰色粘土。層厚20cm。粘性強い。
- 第6層:10GY6/1緑灰色粘土。層厚15~25cm。
- 第7層:10GY7/1明緑灰色粘土質シルト。層厚15~25cm。



写真1 調査風景 (南から)



第2図 東壁断面図 (1/60)

3.まとめ

前述したように、調査以前に現地表下約2.5m(T.P.+4.9m)迄の掘削が完了していたため、不完全な調査となった。第1層の中粒砂～極粗粒砂が優勢な河川堆積層については、第1次・第2次調査で確認されており、第1次調査では層厚が1mに及ぶことが確認されている。第1次調査の成果から、これらの河川堆積層は鎌倉時代末期(14世紀前半)以降に形成されたものと考えられ、当該期以降に大規模な河川氾濫を繰り返したことが推定される。

参考文献

- ・米田敏幸他 1990「福万寺遺跡－上之鳥町北3丁目22-1の調査－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・橋口 薫 2004「Ⅸ福万寺遺跡第2次調査(F K2002-2)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会



調査風景（南から）



東壁断面（西から）

VI 池島・福万寺遺跡第5次調査(FK2004-5)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市福万寺町南4丁目地内で実施した公共下水道工事(16-12工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する池島・福万寺遺跡第5次調査(FK2004-5)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第203号 平成16年10月22日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年2月18日～平成17年2月24日(実働3日間)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約45.6m²を測る。
現地調査においては、飯塚直世・曹龍・都築聰子・徳谷尚子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成17年3月18日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー山内千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	33
2.調査概要.....	33
1) 調査の方法と経過.....	33
2) 基本層序.....	34
3.まとめ.....	34

VI 池島・福万寺遺跡第5次調査(FK2004-5)

1. はじめに

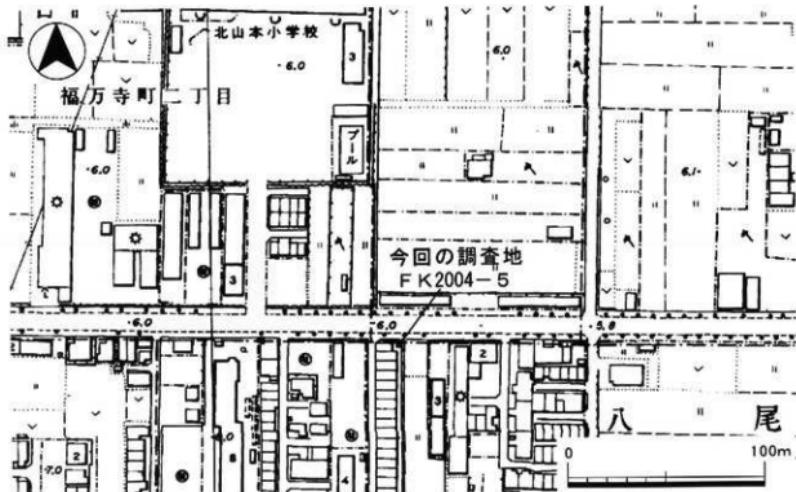
今回の発掘調査は、大阪府八尾市福万寺町南4丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が池島・福万寺遺跡内で実施した第5次調査(FK2004-5)にあたる。調査地点は、大阪府八尾市北東部の福万寺町から東大阪市南東部の池島町にかけての東西1.2km、南北1.7kmに広がる、池島・福万寺遺跡の南部にあたる。調査地点の南東約300mでは、昭和57年に第1次調査(FK82-1)を実施しており、鎌倉時代前期～末期(13世紀前半～14世紀前半)において、屋敷地を構成したと想定される遺構・遺物が検出されている。地理・歴史的環境について、本書IVの「1. はじめに」を参照のこと。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市福万寺町南4丁目地内で行われた公共下水道工事(16-12工区)に伴うものである。調査地は立坑部分の1箇所で、東西幅7.6m、南北幅6.0m、面積は約45.6m²を測る。

調査では現地表下1.5m(T.P.+6.7m)まで機械掘削の後、0.3m前後の人力掘削を予定していたが、現地表下1.7m以下(T.P.+5.0m)において河川堆積層(第4層)が全面に認められたため、平面調査は断念して壁面調査に切り替えた。最終的には、現地表下3.3m(T.P.+3.4m)間での地層堆積を確認した。



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

2) 基本層序

現地表下3.3m(T.P.+6.7~3.4m)の間で、10層(第0~9層)を確認した。第1層の作土層以下は極細粒砂～粗粒砂が優勢な河川堆積層ならびに水成層が連続していた。

第0層：客土。層厚130cm前後。上面の標高はT.P.+6.70m。

第1層：N4/0灰色砂質シルト。層厚5~20cm以上。旧作土層。

第2層：10GY8/1明緑灰色極細粒砂。砂礫を含む。マンガンの斑点。層厚20~25cm。

第3層：N8/0灰白色極細～中粒砂。層厚5~10cm。

第4層：10GY8/1明緑灰色極細～中粒砂。層厚62~92cm。南部に行くに従って層厚が漸増している。上部に雲状マンガン斑が認められる。河川堆積層で一部、第5層がブロックで混じる。

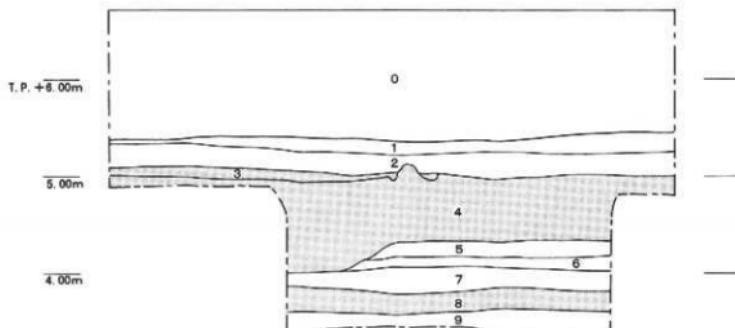
第5層：2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト。層厚15cm。

第6層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト。層厚10cm。炭酸鉄の顆粒が散見される。

第7層：10YR4/1褐色灰色砂質シルト。層厚15~25cm。

第8層：7.5Y7/1灰白色中～粗粒砂。層厚20~25cm。10GY8/1明緑灰色極細粒砂がブロックで混じる。

第9層：N5/0灰色粘土。層厚20cm以上。粘性強い。



第2図 西壁断面図 (S=1/50)

3.まとめ

第1層の作土層以下は、極細粒砂～粗粒砂が優勢な河川堆積層、第6層では葦等の抽水植物による炭酸鉄の顆粒が認められることから、閉塞された静水域から自然河川へと環境変化したことが窺われる。

参考文献

- ・米田敏幸他 1990「福万寺遺跡—上之島町北3丁目22-1の調査—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2004「IX福万寺遺跡第2次調査(FK2002-2)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会



調査区全景（西から）



西壁断面上部（東から）



下部調査状況（南から）



西壁断面下部（東から）

VII 老原遺跡第11次調査（OH2005-11）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市老原3・4丁目地内で実施した公共下水道工事(平成16年度第38工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する老原遺跡第11次調査(OH2005-11)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書(八教生文第216号 平成16年11月2日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年7月7日～同年9月16日(実働5日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は37.12m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は鈴木裕治・曹 龍である。
1. 内業調査は現地調査終了後随時行い、平成17年12月31日に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである

【トレース】西村

【執筆・編集】西村

本 文 目 次

1.はじめに.....	37
2.調査概要.....	37
1) 調査の方法と経過.....	37
2) 検出遺構と出土遺物.....	38
3.まとめ.....	38

VII 老原遺跡第11次調査(OH2005-11)

1.はじめに

老原遺跡は、八尾市の中央に位置し、現在の行政区画では老原1～4丁目・東老原1・2丁目一帯がその範囲となっている。当遺跡は、地形的には長瀬川の左岸の自然堤防上から西側に広がる沖積地上に立地している。

当遺跡内では八尾市教育委員会(以下市教委)および、財團法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、古墳時代後期から近代に至る遺構・遺物の検出があり、同時期の集落が存在していたことが明らかになっている。

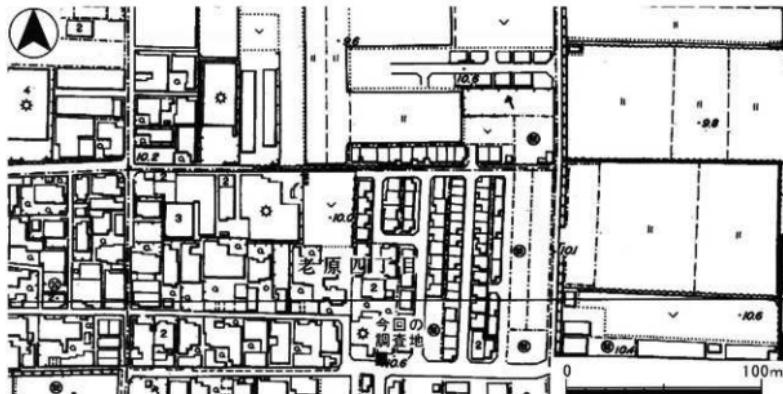
特に今回の調査地付近では、東側約80mの地点で、研究会第6次調査(原田1996)が行われており、平安時代末期～鎌倉時代初頭・室町時代中期・江戸時代後期・明治時代の遺構が検出されている。

当遺跡と同一の沖積地上には、田井中遺跡や志紀遺跡がある。これらの遺跡は当遺跡の南側に近接している。田井中遺跡では弥生時代から古墳時代中期の遺構および遺物を検出しており、集落が存在していたことが明らかになっている。また、志紀遺跡では弥生時代から鎌倉時代頃の生産遺構などが検出されている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(平成16年度第38工区)に伴う調査で、研究会が老原遺跡内を行った第11次調査にある。調査は立坑部分について実施した。調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約2.5mまでを機械と人力で掘削し、以下0.7mの厚みの地層について調査を行ない、以下工事掘削深度の約5.5mの深さまでの地層については、堆積状況

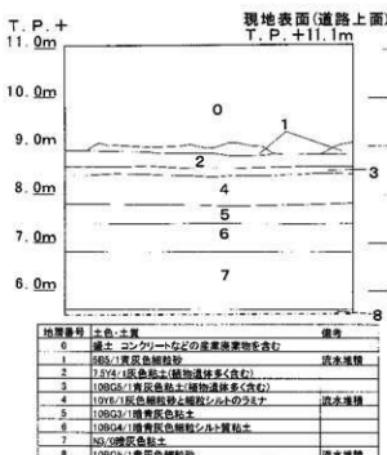


第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

の確認を行った。今回の調査では、八尾市下水道部作成の地図に記載している標高値(KBM 2=T.P.+10.920m)を使用した。

2) 検出遺構と出土遺物

現地表面はT.P.+11.0m前後で、現況は道路である。以下深さ5.5mまでに9層の堆積土を確認した。0層は盛土で、厚さ2.1~2.2mを測る。1層は5B5/1青灰色細粒砂の流水堆積である。2層は7.5Y4/1灰色粘土(植物遺体多く含む)。3層は10BG5/1青灰色粘土(植物遺体多く含む)。4層は10Y6/1灰色細粒砂と細粒シルトのラミナで、厚さ約0.6mを測る流水堆積である。5層は10BG3/1暗青灰色粘土。6層は10BG4/1暗青灰色細粒シルト質粘土。7層はN3/0暗灰色粘土。8層は10BG5/1青灰色細粒砂の流水堆積である。



第2図 南壁面図

3.まとめ

今回の調査では遺構の検出および遺物の出土はなかった。1・4・8層は流水堆積で、河川からの洪水に伴う砂層である可能性が高い。2・3・5~7層は滞水状態を示すことから、湿地帯であった可能性が極めて高いと考えられる。

参考文献

- ・原田昌則2004「老原遺跡第6次調査」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告81』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則2004「老原遺跡第7次調査」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告81』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2004「老原遺跡第8次調査」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告81』財團法人八尾市文化財調査研究会



調査地周辺（南から）



西壁 T.P.+11.0~8.5m（南東から）



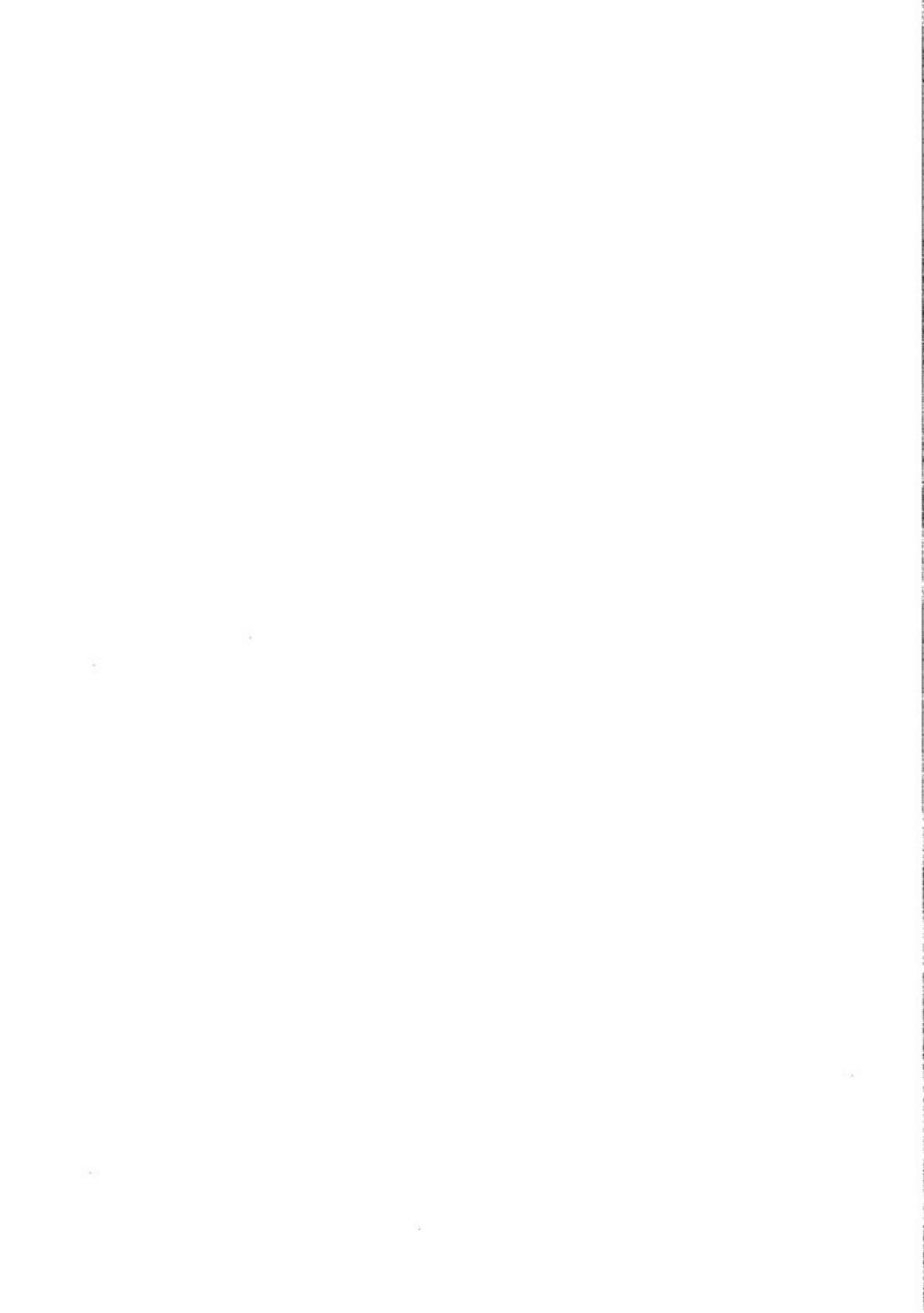
南壁 T.P.+9.0~7.8m（北から）



南壁 T.P.+7.8~7.1m（北から）



南壁 T.P.+7.1~5.5m（北から）



VIII 恩智遺跡第16次調查（O J 2005-16）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市恩智中町1・3丁目、恩智南町1丁目地内で実施した公共下水道工事(16-106工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第16次調査(OJ 2005-16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第328号 平成17年2月9日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年4月1日～6月1日(実働7日)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約32m²を測る。なお、調査においては飯塚直世・岩本順子・鈴木裕治・曹龍・都築聰子・永井律子・中村百合・村井俊子・若林久美子(五十音順)が参加した。
1. 内業整理は現地調査後に着手し、平成17年8月12日に終了した。
1. 本書の図面トレースおよび執筆・編集はすべて岡田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	41
2.調査概要.....	43
1) 調査の方法と経過.....	43
2) 基本層序.....	43
3) 検出遺構と出土遺物.....	45
3.まとめ.....	45

Ⅷ 恩智遺跡第16次調査(OJ 2005-16)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する縄文～鎌倉時代に至る複合遺跡である。地理的には、生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がる。行政上の遺跡範囲は、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にまたがる南北約1.2km・東西約1.0kmを測る。本遺跡の周辺には、北に郡川遺跡、南に神宮寺遺跡、さらに西には玉串川を挟んで東弓削遺跡が隣接する。

本遺跡は、大正6年(1917年)に恩智中町3丁目において京都大学考古学研究室によってはじめて発掘調査された。その後、昭和14年(1939年)に大阪府による調査が実施され、恩智神社のお旅



第1図 調査位置および周辺図 (S=1/2500)

第1表 今回の調査地周辺における既往の調査一覧表（第1回対応）

No.	調査年	主な検出遺構・出土遺物	文献
1	昭和49年	绳文時代晚期～弥生時代～土器	山本昭・泉本知秀・福岡澄男「八尾市恩智遺跡の出土遺物」『大阪文化誌』第2巻1号
2	昭和50年	弥生時代前期～古墳時代中期～木棺墓・土坑・溝・自然河川、古墳時代前期・井戸・溝	田代克己他 1980「恩智遺跡」瓜生堂遺跡調査会
3	昭和51～53年	弥生時代中期～遺構・遺物多数検出	未報告
4	昭和59年	弥生時代～遺構・遺物	米田敏幸 1985「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」
5	昭和61年	绳文時代晚期～上器集積・落ち込み・小穴 绳文時代中期～弥生時代～土器・石器・動植物遺存	鶴村友子 1987「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ—恩智遺跡の調査—」
6	昭和62年	遺構・遺物なし	鶴村友子 1988「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ(86-494)」
7	昭和62年	弥生時代中期～土坑・小穴	米田敏幸 1988「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ(86-518)」
8	昭和63年	弥生時代中期～上器・石器 古墳時代～土器	近江俊秀 1989「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ(62-529)」
9	昭和63年	弥生時代～古墳時代～土器・石器	米田敏幸 1989「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ(63-361)」
10	昭和63年	弥生時代中期～土器・石器	米田敏幸 1989「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ(63-399)」
11	平成2年	弥生時代～ピット 弥生時代中期～土坑 弥生時代～古墳時代～土器・石器	酒井斎 1991「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ(90-282)」
12	平成7年	弥生時代中期～落ち込み状遺構	酒井斎 1997「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ(92-640)」
13	平成7年	弥生時代中期～後期～小穴状の落ち込み・ 落ち込み状遺構 弥生土器・須恵器	米田敏幸 1996「八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ(95-169)」
14	平成8年	弥生時代中期～上器・石器	藤井淳弘 1997「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ(96-408)」
15	平成9年	弥生時代～中世～土器・石器	藤井淳弘 1998「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ(96-471)」
16	平成9年	绳文時代晚期・弥生時代中期前半～土器・ 石器	酒井斎 1998「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ(96-747)」
17	平成9年	古墳時代後期以降～上器	藤井淳弘 1998「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ(97-38)」
18	平成9年	弥生時代中期・中世～土器・石器	藤井淳弘 1998「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ(96-657)」
19	平成10年	弥生時代中期～落ち込み状遺構	藤井淳弘 1999「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ(98-54)」
20	平成10年	绳文時代晚期後葉～上器溜り 弥生時代前期～溝 弥生時代中期～土坑状遺構	吉田野方 1999「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ(98-54)」
21	平成12～13年	弥生時代中期～後期～上器・石器	岡田清一 2001「I. 恩智遺跡(第8・9次調査)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告71』
22	平成13年	绳文時代晚期～土器・土偶、 弥生時代中期～土坑・上器集積・落ち込み、 土器・石器	森木めぐみ 2003「VI. 恩智遺跡(第11次調査)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』
23	平成16年	弥生時代中期・中世～土器・石器	岡田清一 2005「III. 恩智遺跡(第15次調査)」 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告82』

※ 3～20⇒八尾市教育委員会、21～23⇒(財)八尾市文化財調査研究会

所である「天王の森」を中心に広がる弥生時代の大規模な集落遺跡であることが判明した。以後、瓜生堂遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会によって多次に亘る調査が実施されている。それらの結果、縄文時代から弥生時代への移行を完結する上で貴重な成果が得られており、本遺跡の該期の様相が徐々に明らかになってきている。

今回の調査地は「天王の森」から南西約200mにあたる現恩智川沿いおよびその付近に位置する。近隣における既往の調査成果をみると、今回の調査地の北方で昭和50年に実施された恩智川改修工事に伴う調査(第1図-2)により、弥生時代前期～古墳時代中期にかけての木棺墓・土壙墓・井戸・溝群といった遺構をはじめ、多量の遺物が検出されている。また、昭和51～53年に実施された共同住宅建設に伴う遺構確認調査(第1図-3)においても、弥生時代中期に比定される多量の遺物が出土している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事に伴うもので、当研究会が恩智遺跡内で実施する第16次調査にあたる。調査対象は人孔部分にあたる2m四方の調査区8箇所(第2図 第1～8区)で、掘削深度は各人孔の工事規模に準じ、現地表(T.P.+12.5～13.0m付近)下1.5～2.0mとした。掘削は、既存の道路築造および河川改修工事に伴う盛土部分(層厚0.5～1.0m)を重機によって排除した後、以下の地層を重機・人力併用で工事対象深度まで進め、遺構・遺物の検出に努めた。

2) 基本層序

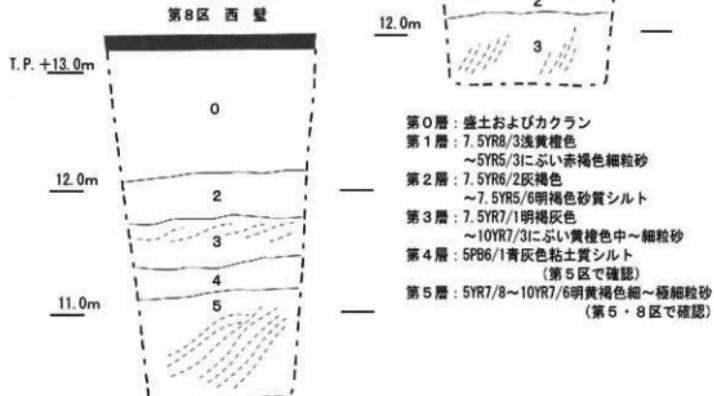
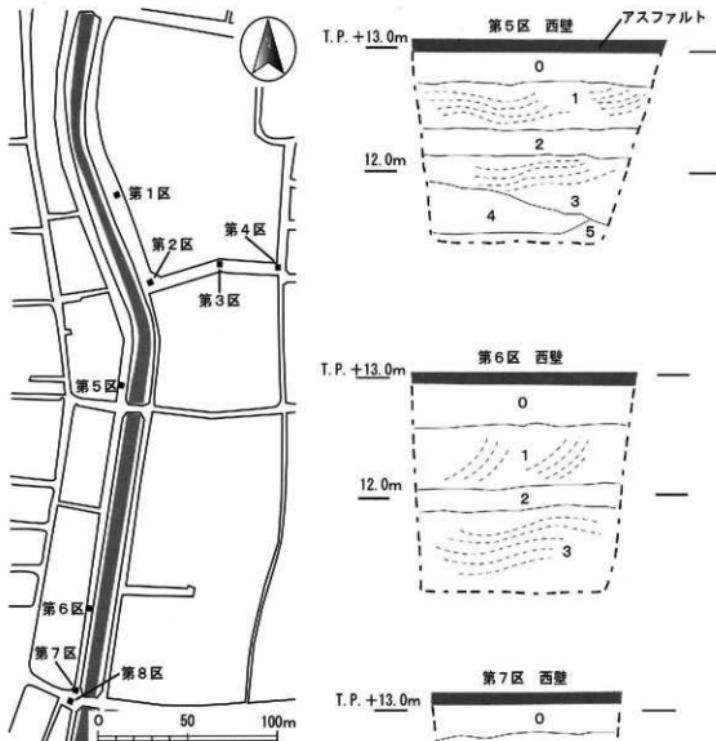
今回の調査では、北部の人孔部分にあたる第1～4区の4箇所は、既述の昭和51～53年に実施された共同住宅建設に伴う水道・ガス・電話ケーブルといった配管工事により、現地表から2m前後まで破壊を受けていた。一方、南部の人孔部分にあたる第5～8区の4箇所についても、昭和50年代以降の恩智川改修工事に伴い、同等の深さの破壊を受けていたが、幸いに破壊を免れた西側の一部が遺存しており、工事の盛土およびカクラン(第0層)を除いて5層の地層観察をすることができた(第2図)。以下、この4調査区で確認できた各地層について記述する。

第0層：現代の盛土および道路アスファルト部分である。層厚は、第5～7区が0.3～0.4mであるが、南端部にあたる第8区は近接する既存のマンホール設置工事に伴い、1.2m前後を有する。各調査区ともに盛土の下部中には近世の陶磁器片がわずかに含まれており、河川改修工事の際に当該期の地層が攪拌されたものと思われる。

第1層：7.5YR8/3浅黄橙色～5YR5/3にぶい赤褐色細粒砂。第8区では見られなかった。層厚0.4～0.5mを測る。ラミナが顕著で、酸化鉄分が多量に沈着する。中世に比定される土師器および瓦器の小破片が僅かに含まれる。旧恩智川の洪水によるものと推定される。

第2層：7.5YR6/2灰褐色～7.5YR5/6明褐色砂質シルト。層厚は第5～7区が0.2m前後、第8区が0.3m前後を測る。古墳～奈良時代と推定される須恵器の破片が含まれるが、層中に遺構面は確認できなかった。

第3層：7.5YR7/1明褐色～10YR7/3にぶい黄橙色中～細粒砂。層厚は第5・8区で0.2～0.4mであるが、第6～7区では0.5m以上を測り、底面は検出できなかった。ラミナは顕著に確認できる。遺物は含まれていないが、上下層の様相から古墳時代以前にあたる旧恩



第2図 調査区位置および断面図 (S=1/40)

智川の洪水層と推定される。

第4層：5PB6/1青灰色粘土質シルト。第5・8区で確認した。層厚0.1~0.4mを測る。層中に遺構・遺物は見られなかった。

第5層：5YR7/8~10YR7/6明黄褐色細～極細粒砂。第5・8区で確認した。両調査区ともに底面は確認しておらず、第8区においては層厚0.9m以上を測り、ラミナが顕著に見られた。層内からはローリングを受けた弥生時代の甕と高杯の柱状部の破片が出土したが図化不能で、詳細な時期は不明である。

3) 検出遺構と出土遺物

遺構は、第5～8区で旧恩智川に起因する砂層の堆積を地層断面で捉えることができた。遺物については同区の各層内から弥生時代～近世にかけての土器片および陶磁器片が僅かに出土したが、いずれも小破片で図化するまでには至らなかった。

3.まとめ

今回の調査では対象となる地点が、住宅開発および河川改修工事に伴い、破壊を受けていたが、現恩智川左岸における調査地点では、辛うじて遺存する地層と出土遺物から弥生時代以降中世までの旧恩智川の変遷を把握することができた。



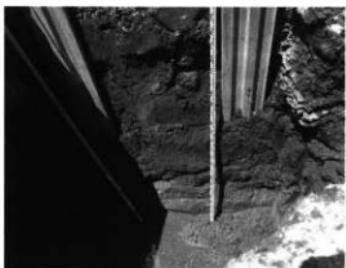
調査地<左奥>と恩智川（南から）



第5区 西壁面



第7区 西壁面



第6区 西壁面



第8区 西壁面



カクラン状況（第2区 南西から）



人力掘削状況（第8区 南東から）

IX 恩智遺跡第17次調査（O J 2005-17）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市恩智中町3丁目で実施した公共下水道工事(16-107工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第17次調査(OJ 2005-17)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第60号 平成17年5月26日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年6月1日～8月10日(実働13日)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約44m²を測る。なお、調査においては市森千恵子・岩本順子・鈴木裕治・曹龍・都築聰子・徳谷尚子・村井俊子(五十音順)が参加した。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手し、平成17年10月31日に終了した。
1. 繩文土器については、松尾信裕氏(財団法人 大阪市文化財協会)に実見して頂き、ご教示を賜った。
1. 本書の遺物実測－市森・國津れい子・鈴木・徳谷、遺物トレース－山内千恵子、その他の図面トレースおよび執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	47
2.調査概要.....	47
1) 調査の方法と経過.....	47
2) 基本層序.....	47
3) 検出遺構と出土遺物.....	47
3.まとめ.....	56

IX 恩智遺跡第17次調査(OJ 2005-17)

1.はじめに

今回の調査地は、本書の「Ⅸ 恩智遺跡第16次」調査地東部、「天王の杜」南部にある。本調査も第16次と同様、上述の公共下水道工事に伴う人孔部分の発掘調査である。地理・歴史的環境等、調査位置図については本書の「Ⅸ 恩智遺跡第16次調査」を参照されたい。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、既述したように公共下水道工事に伴うもので、当研究会が恩智遺跡内で実施する第17次調査にある。調査対象は人孔部分にある一辺約0.8m四方の調査区11箇所(第1図 第1~11区)で、掘削深度は各人孔の工事規模に準じ、現地表(T.P.+16.7~18.5m付近)下1.6~2.5mである。今回の調査区は狭小な上に民家に近接していることもあり、側壁の崩壊を防ぐ簡易鋼矢板を打設しながらの掘削であったため、安全を考慮した上で重機による掘削が主となつた。遺構および遺物の検出については、状況に応じて人力を用いて努めたが、遺物については主として現地表における重機掘削残土からの採集に拘った。

2) 基本層序

今回の調査地では、現地表の標高が最も高い北東部の第7区でT.P.+18.3m、最も低い南部の第11区でT.P.+16.7mとその差約1.6mを測る。盛土(第0層)の厚みについては全調査区が一様ではなく、旧のガス・水道管理設に伴う掘方によって古墳時代(第2層)以降の地層が削平されている調査区もあれば、0.2mほどの盛土下に中・近世の整地層(第1層)とも考えられる堆積層が遺存しているところもある。「天王の森」周辺における既往の調査成果からも窺える弥生時代の堆積層(第3層)については、北部にあたる第4区を除くすべての調査区で確認できた。さらに同じ北部でも第3区については弥生時代の下層部分において、縄文時代晚期に比定される堆積層を確認することができた。また、今回の調査地で最も標高の高い北東部にあたる第4・5・7区では、現地表下1m前後のところで、径0.3~0.6m迄の巨礫を多量に含む地山(第7層)を見るに至った。

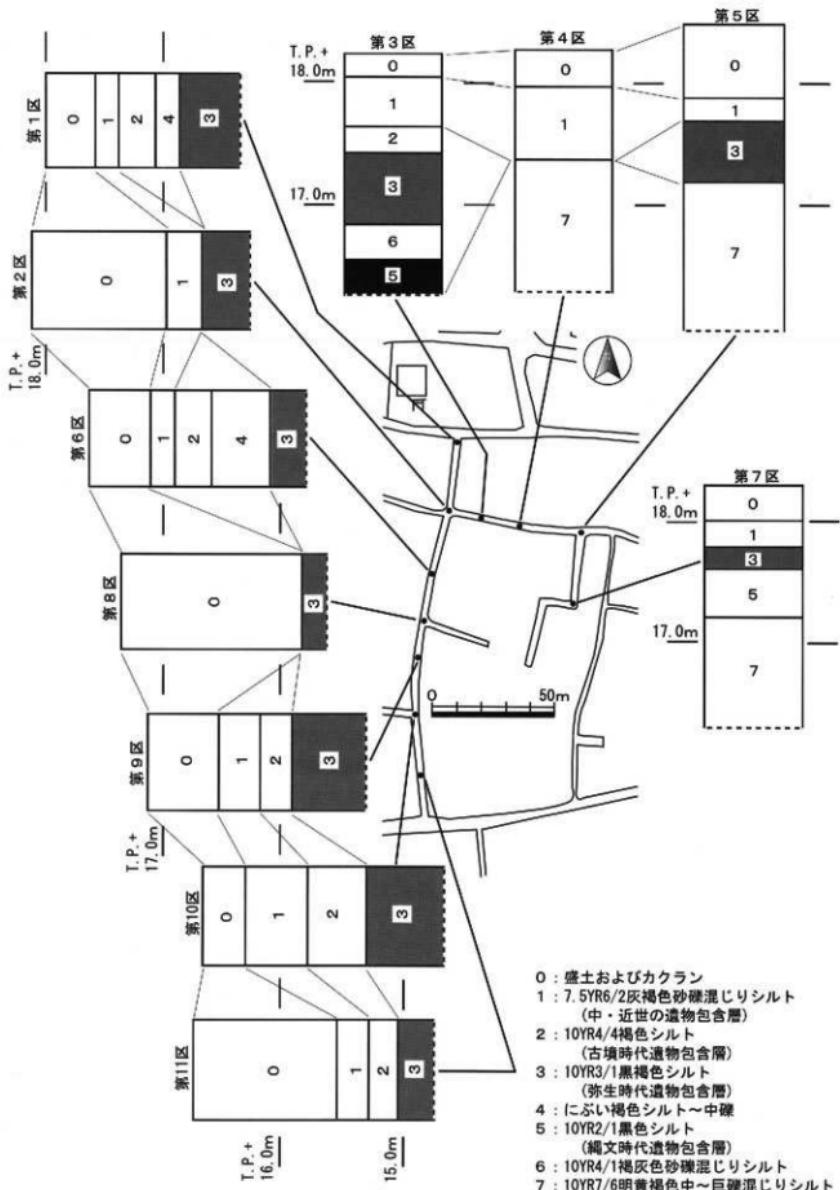
3) 検出遺構と出土遺物

遺構は確認できなかった。遺物については、縄文時代晚期~近世に至る土器類および陶磁器類を検出するに至った。全体の遺物量はコンテナパットで7箱分を数える。そのうちの9割は弥生時代中期に比定される土器類である。縄文時代晚期の土器については、「天王の森」に近接する第1~3区からの出土で、第1・2区については弥生時代中期の地層に混入していたものであるが、第3区については縄文時代晚期に比定される地層からの出土である。以下、調査区毎に図化できた出土遺物について記述する。

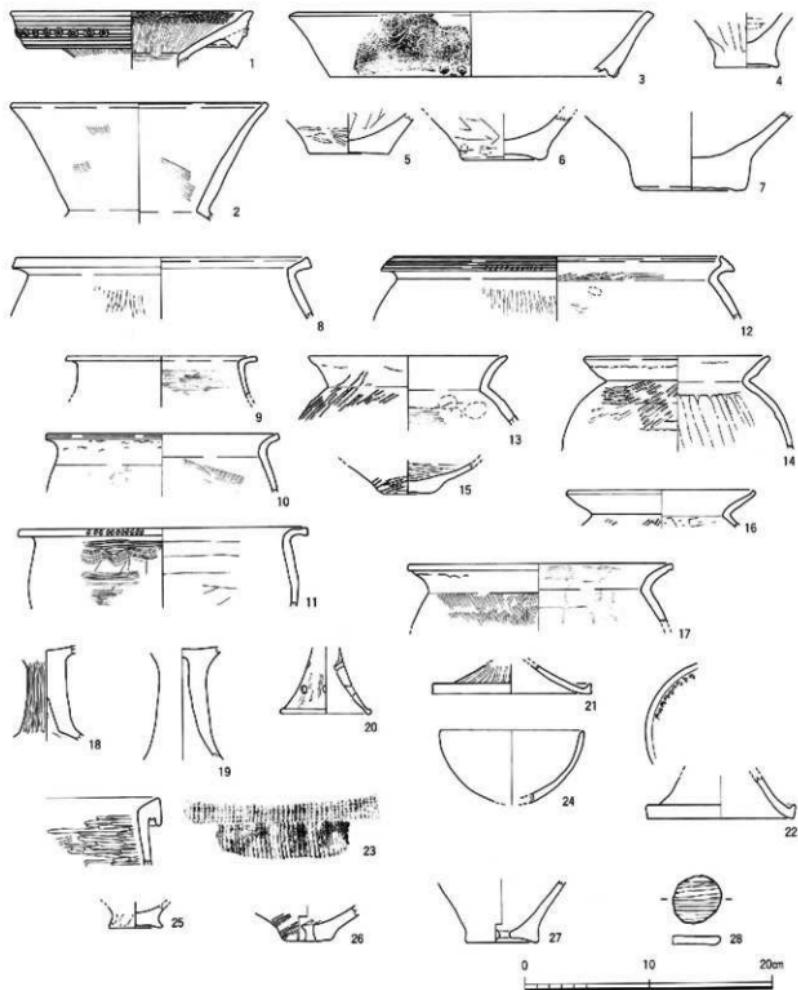
[第2区]

壺7点(1~7)、甕10点(8~17)、高杯5点(18~22)、鉢5点(23~27)、土製品1点(28)の計28点である。

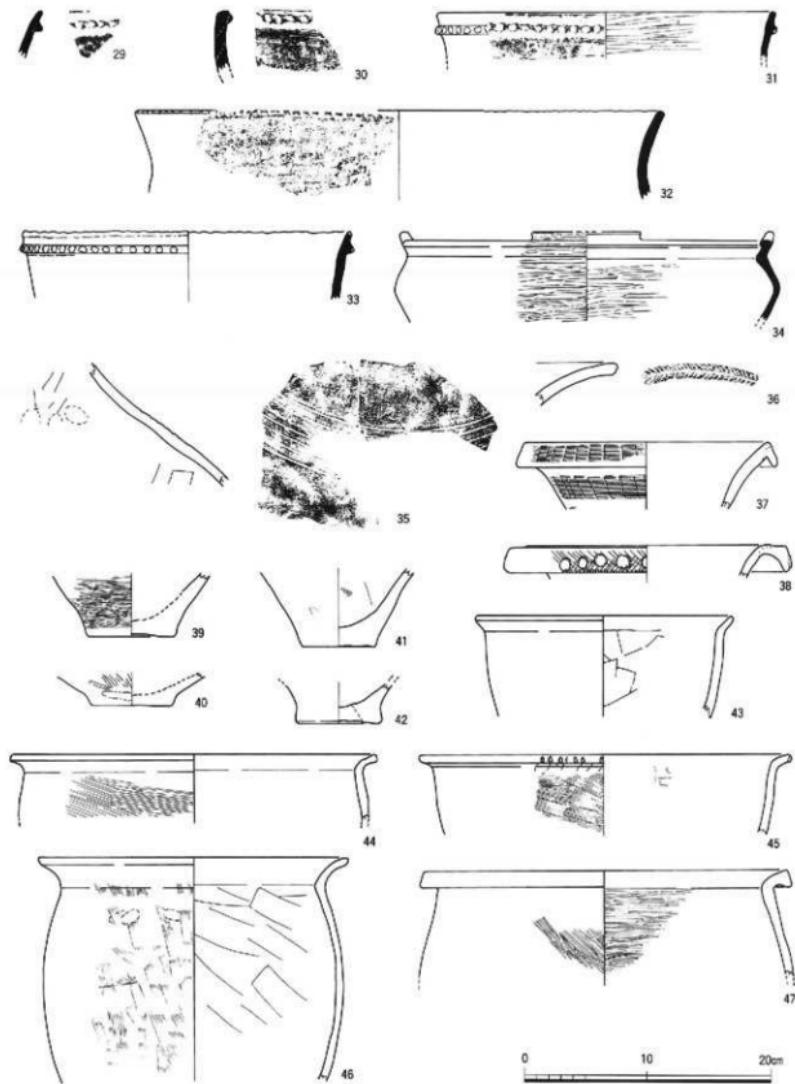
【壺】1は弥生時代中期後半に比定される広口壺である。口縁部は、下部に粘土帯を貼り付け



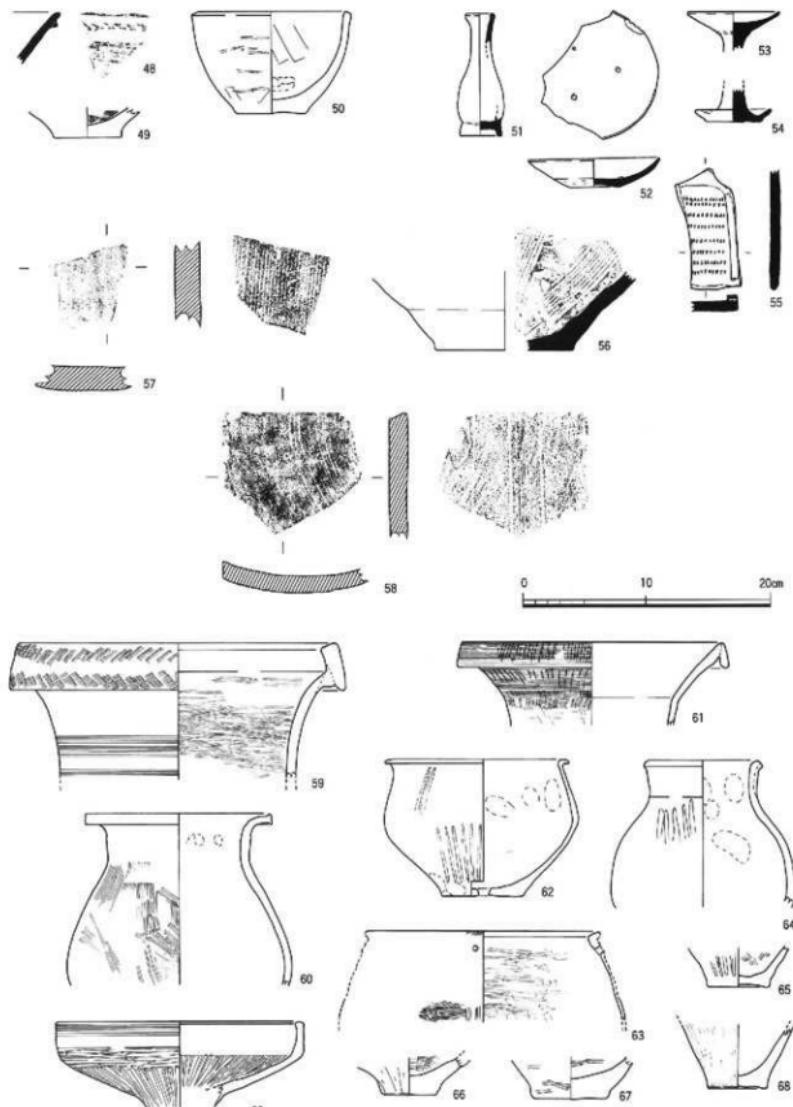
第1図 調査区位置 ($S=1/2000$) および地層断面模式図 ($S=1/40$)



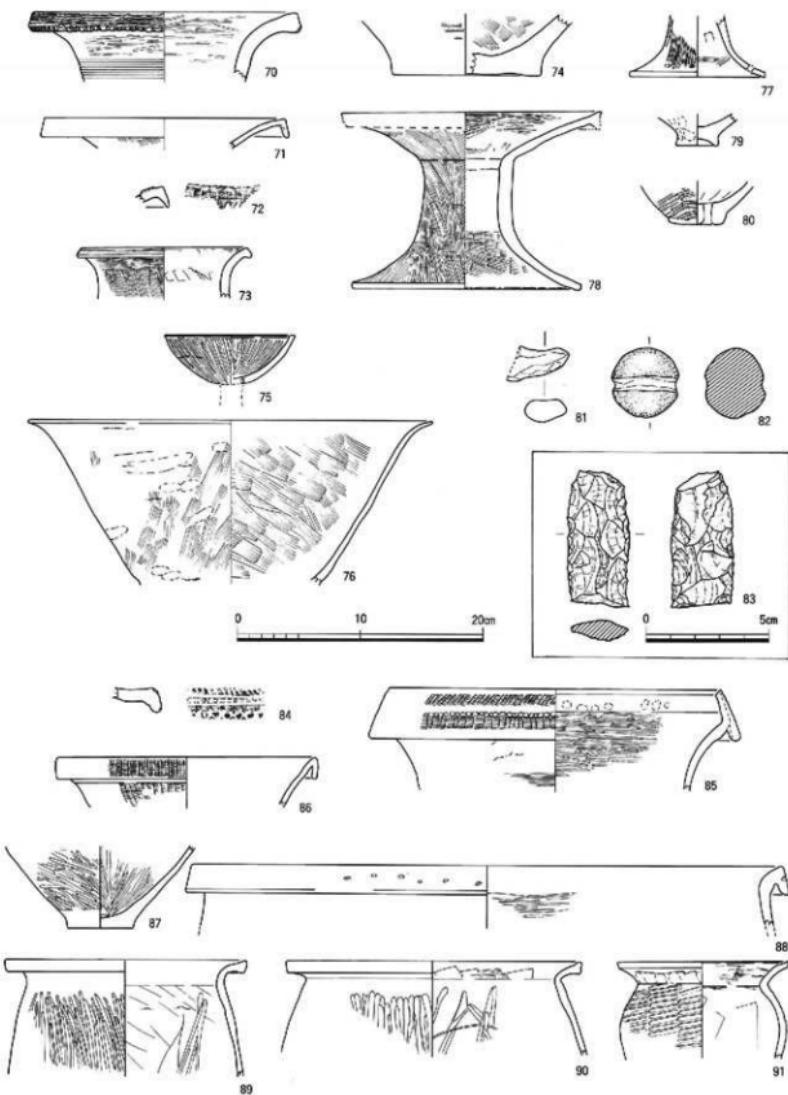
第2図 第2区出土遺物実測図 (S=1/4)



第3図 第3区出土遺物実測図 (S=1/4)



第4図 第4区(48~58)、第5区(59~69)出土遺物実測図(S=1/4)



第5図 第8区(70~83)、第9区(84~91)出土遺物実測図 (※83は1/2、83以外はすべてS=1/4)

垂下させる。さらに外面には数条の凹線を廻らした後、竹管浮文を貼り付ける。2は古墳時代初頭(以後、庄内式期)後半～前期(以後、布留式期)前半に比定される大型の直口壺である。口縁部は上外方へ直線的に伸び、端部は丸く収める。3は庄内式期前半に比定される二重口縁壺である。外面は波状文と円形浮文で加飾される。4～7は底部のみの残存である。形態は、やや上げ底(4・6)、平底(5)、突出底(7)の3種がある。

【壺】8は弥生時代中期中葉に比定される。外上方へ短く伸びる口縁部の端部は、上下に肥厚する。9～11は弥生時代中期後半に比定される。水平気味に伸びる口縁部の端部は、外傾する面を有する。10の口縁部は外反して伸び、これも端部は外傾する面を有する。11はほぼ水平に伸びる口縁部を有し、端部は上下にやや肥厚する。端部外面には刻み目、肩部は波状文によって加飾される。12は弥生時代後期前半に比定される。上下に肥厚させた口縁部の外面には凹線を廻らし、さらに一部に小さな刻み目を施す。13～15は弥生時代後期末に比定される。口縁部は外反気味に伸び、端部は尖り気味に收める。外面のタタキ痕が口縁部まで及ぶ。14は丸みのある肩部から、中ほどで肥厚する口縁部に至る。内外面には数条の接合痕が顯著で、全体的に作りが粗雑である。16は庄内式期後半に比定される。口縁部は体部から鋭く屈曲し、外反後内彎して立ち上がり、端部は摘み上げる。17は布留式期後半に比定される。口縁部は外上方に向けて2段屈曲する。

【高杯】18～20は弥生時代後期、21・22は中期に比定される。18・19は柱状部のみの残存で、18の外面は縦方向に密なヘラミガキが施される。20～22は脚据部のみの残存である。20は上下段に2個以上の穿孔が認められるが、破片のため詳細は不明である。21・22の裾端部は摘み上げて、外側に凹面を成す。21の裾部外面は縦方向に密なヘラミガキが施され、22は竹管押捺文が廻らされる。

【鉢】23は弥生時代中期後半に比定される大型鉢である。垂直の体部に、端部が垂下する口縁部が付く。口縁部、体部とともに外面は簾状文が施される。24は布留式期後半に比定されるもので、半円形を呈する小型鉢である。25は庄内式期～布留式期前半に比定される台付鉢の底部と思われる。26・27は有孔鉢の底部と思われる。26の外面にはタタキ痕が見られる。

【土製品】28は土製円盤で、用途は不明である。片面にはヘラミガキが認められる。

[第3区]

深鉢5点(29～33)、浅鉢1点(34)、壺8点(35～42)、甕5点(43～47)の計19点である。

【深鉢】29～31は口縁端部の直下に1条の刻目凸帯を廻らすもので、33はさらに口縁部上端に刻目が施される。口縁部内外面の調整はすべてヨコナデである。32の口縁部は弧を描くように外反するもので、上端部に刻み目をつける。調整は内外面ともにヨコナデである。外面には煤が認められる。以上は縄文時代晩期の所産で、29～32は滋賀里Ⅲb式、33は船橋式に比定される。

【浅鉢】34の口縁部は短く外反し、端部は内面に肥厚する。また、一部に突起を有する。肩部は屈曲してやや稜を成す。内外面とも横方向にミガキ調整が施される。縄文時代晩期の所産で、滋賀里Ⅲb式に比定される。

【壺】35・37・38は広口壺の肩部および口縁部である。35は内面がユビナデ、外面はナデ調整のちに数条のヘラ描沈線文を施す。弥生時代前期後半に比定される。36は大きく外反する口縁部で、外傾する端面には矢羽状の刻み目が施される。弥生時代前期後半～中期前半頃の所産と思われる。37・38は口縁端部が垂下し、外傾する端面には櫛描き簾状文(37)、円形浮文(38)で加飾さ

れる。いずれも弥生時代中期後半に比定される。39~42は底部のみの残存で、やや上げ底のもの(39・42)と平底(40・41)に分類できる。39・40の外面はヘラミガキ調整される。

【壺】43・45は、全体が倒鐘形を呈すると見られるものであるが、口縁部の形態は内彎するもの(43)と外反するもの(45)とに分かれる。45は外傾する口縁端面に刻み目を有する。弥生時代前期後半に比定される。44は口径に比して小さめの口縁部を呈する。口縁部は外傾する面を有する。弥生時代前期後半に比定される。弥生時代中期前半に比定される。46は体部外面をハケナデ調整するもので、口縁部は外反し、端部は丸く収める。47は張りの弱い体部から屈曲して、やや垂下する口縁端部が付く。外傾する端面は平坦な面を有する。双方とも弥生時代中期後半の所産であろう。

[第4区]

深鉢1点(48)、壺1点(49)、鉢1点(50)、徳利1点(51)、灯明皿3点(52~54)、下ろし器1点(55)、擂鉢1点(56)、瓦2点(57・58)の計11点である。

【深鉢】48は口縁端部の直下に1条の刻目凸帯を巡らす。縄文時代晩期の所産で、滋賀里Ⅲb式に比定される。

【壺】49は底部のみ残存で、平底を呈するものである。

【鉢】50は平底から内彎して、直立する口縁部に至る。口縁端部は外傾する面を有する。外面には僅かにタタキ痕が見られる。弥生時代後期後半に比定される。

【徳利】51は高台を除く外面に藍色の瑠璃釉を掛けた陶器製のお神酒徳利で、19世紀後半の京・信楽系の所産である。

【灯明皿】52は体部が上げ底の同心円ケズリで、内面には透明釉が掛かる。見込みには3個のハリ支え痕が認められる。53と54は台付の灯明皿で、53が灯芯受け皿、54が台となる。双方とも淡い緑釉が掛かる同種のものだが、別個体である。以上3点ともに陶器製で、19世紀後半の京・信楽系の所産である。

【下ろし器】陶器製で、胎土は浅黄橙色を呈する。刻み目のある下ろし部には、灰釉が掛かる。生産地は不明であるが、19世紀後半の所産と思われる。

【擂鉢】56は備前焼で、10本1単位の擂り目を有する。17世紀前半頃の所産と思われる。

【瓦】57・58は平瓦で、いずれも凸面は縄目タタキであるが、57のほうが明瞭で、58はナデ消された状況が窺える。凹面についても、57が布目痕であるのに対し、58は鉄線引きの痕が見られる。57が中世、58は近世の所産であろうか。

[第5区]

壺10点(59~68)、高杯1点(69)の計11点である。

【壺】59・60は広口壺で、59は口縁端部が上下に肥厚する付加状を呈する。口縁部は櫛描き文、頸部は櫛描き直線文で加飾される。60は直立する頸部から外反して水平に伸びる口縁部を有する。口縁端部は59ほどではないが上下にやや肥厚する。胴部はやや丸みをもつ。61は垂下口縁を有し、口縁から頸部にかけて櫛描き簾状文が施される。62・63は無頸壺である。62は張りのある胴部に短く水平に伸びる口縁部が付く。また、底部中央には穿孔が認められる。63は62よりさらに矮小の口縁部を呈する。全体的に摩滅が著しいが、外面の一部には流文水の装飾が見られる。口縁部直下には蓋用の双孔とともにこのような穿孔が認められるが、破片であり詳細は不明である。以上

は、弥生時代中期中葉～後半に比定される。64は広口短頸壺である。丸みをもつ胴部から直立し、若干外反して肥厚気味に収める口縁部に至る。弥生時代後期前半に比定される。65～68は底部のみの残存である。上げ底気味のもの(65・68)と平底(66・67)がある。

【高杯】69は半球状の杯部を有し、口縁部は直口する形態をもつ。口縁部は数条の櫛描き直線文で装飾し、杯体部の内外面はヘラミガキ調整される。弥生時代中期末頃に比定される。

【第8区】

壺5点(70～74)、高杯3点(75～77)、器台1点(78)、器種不明底部2点(79・80)、土師器把手1点(81)、石製品2点(82・83)の計14点である。

【壺】70は大きく外反する口縁部と端部は上下にやや肥厚する広口壺である。凹面を呈する口縁端部外面には櫛描き波状文、その直下には刻み目が施される。弥生時代中期前半に比定される。71・72は垂下口縁を呈する広口壺である。72の口縁端部内面には、円形浮文が貼り付けられる。71が弥生時代中期中葉、72が弥生時代中期後半にそれぞれ比定される。73は短頸広口壺で口縁端部は下方にやや垂下し、凹面を呈する。端部外面には数条の櫛描き沈線を巡らす。弥生時代後期前半に比定される。74は大型壺の底部と見られるもので、平底を呈する。

【高杯】75は半円形を呈する椀形高杯の杯部である。口縁端部は内外にやや肥厚し、上部に平坦面をもつ。杯部の内外面は縦方向に密なヘラミガキ調整される。76は大型の杯部を有するもので、緩やかに内彎して伸びる体部から外反する口縁部にいたる。外面には数条の接合痕が認められる。いずれも布留式期後半に比定される。77は裾部のみの残存であるが、裾端部直上の位置に2箇所の穿孔が認められる。双方とも弥生時代後期後半の所産と思われる。

【器台】78は中空のもので、受部と裾部が大きく開く。受部の口縁端部は少し欠損しているが、状況から察してやや上下に肥厚し、凹面を呈するものと思われる。内外面ともにハケナデ調整される。弥生時代後期後半の所産と思われる。

【器種不明底部】79は上げ底状のもので、外面は指頭压痕が顕著に認められる。80は有孔鉢とも考えられるが、詳細は不明である。底部中央よりやや外側に孔が穿たれる。外面にはタタキ目が残る。いずれも弥生時代後期頃の所産と思われる。

【土師器把手】81は手づくねで、やや扁平である。

【石製品】82は凝灰岩製の石錘で、中央には紐掛け用の抉りを巡らす。83はサヌカイト製の石剣である。両側縁から調整剥離を施し、鋭利な刃部を形成している。

【第9区】

壺4点(84～87)、甕4点(88～91)の計8点である。

【壺】84～86は広口壺である。84は口縁部が水平に伸びるものと思われ、端部外面にはヘラにより斜線文、格子文、×印文といった多彩な文様を刻む。弥生時代中期半ば頃の所産であろう。85は口縁端部が上下に伸びる付加状のもので、外面には櫛描き列点文、簾状文を施す。86は垂下口縁を呈するもので、外面は櫛描き簾状文で加飾される。双方とも弥生時代中期後半に比定される。87は底部のみの残存で、平底を呈する。外面はヘラミガキが密に施される。

【甕】88は大型のもので、口縁端部は折り返すように垂下する。その端面には径2～3mmほど刺突円孔が認められる。弥生時代中期後半の所産である。89・90は同種のもので、水平気味に外反する口縁部を有し、端部は上下にやや肥厚する。体部外面は縦方向にヘラミガキ調整される。

弥生時代中期半ばに比定される。91は体部から「く」の字状に屈曲し、端部は摘み上げる。口縁部には指頭圧痕と接合痕が明瞭に見られ、仕上げは粗雑である。また、体部外面のタタキ目も明瞭である。弥生時代後期末の所産と思われる。

3.まとめ

今回の調査では遺構を捉えることができず、結果的に遺物採集に終わってしまったことは残念であるが、弥生時代とくに中期に比定される地層の広がりと、北部の「天王の森」付近で縄文時代晚期の土器および地層の検出によってまた一つ、恩智遺跡の調査成果に累積をもたらした。当遺跡では、既往の調査から「天王の森」を中心に弥生時代中期の遺構・遺物が濃密に遺存していることが周知されており、今回の調査も予想通りの結果となつたが、今回の調査で特筆すべきは、縄文時代晚期に比定される地層と遺物の検出である。当該期については、本調査の第1区から西へ約20m地点で実施された市教委による調査において縄文時代中期～晚期、とくに晚期中葉の土器が多く検出されている。また、平成13年度に実施された「天王の森」の南側市道内における公共下水道工事に伴う調査においても、晚期に比定される検出例の少ない土偶がみつかっている。こういった既往の調査成果からも「天王の森」付近には弥生時代の下層に縄文時代の遺構が広がっていることが明らかであり、少なくとも当地一帯において縄文時代晚期以降は人の営みに適する安定した土地条件であったことがみてとれる。

参考文献

- ・鷲村友子 1987.3『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ 一恩智遺跡の調査一』八尾市文化財調査報告14 昭和61年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・森本めぐみ 2003「VI 恩智遺跡第11次調査(OJ 2001-11)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告75」財団法人 八尾市文化財調査研究会



第1・2区 調査地付近（南から）



第10・11区 調査地付近（南から）



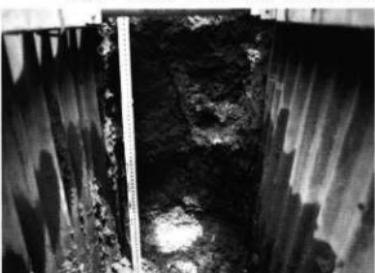
第1区 西壁面 (T.P. +16.5~18.0m付近)



第10区 北壁面 (T.P. +15.0~16.0m付近)



第9区 調査状況



第11区 北壁面 (T.P. +14.5~15.5m付近)



第9区 北壁面 (T.P. +15.5~17.0m付近)



同上 東壁面 (T.P. +16.0~17.0m付近)

図版一 出土遺物



1



8



2



9



3



11



4



12



7



13

第2区

圖版三 出土遺物



14



22



17



26



18



27

第2区



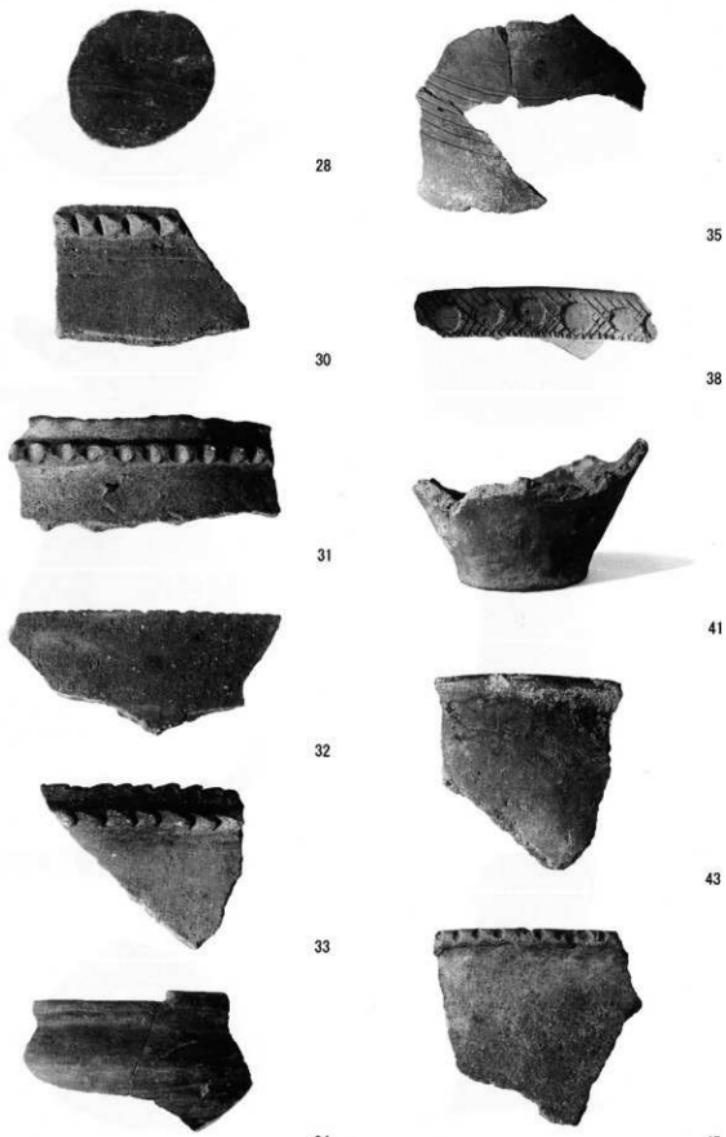
19



28



图版四 出土遗物



第2区(28)、他第一3区



46



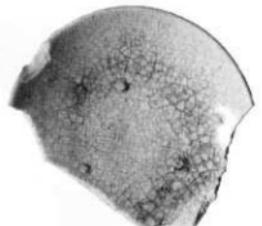
51



50



55



59



60

第3区(46)、第4区(50・51・55)、第5区(59・60)



57



58



61



63



62



64

第4區(57·58)、他—第5區

圖版七 出土遺物



69



78



70



|



80



77



82



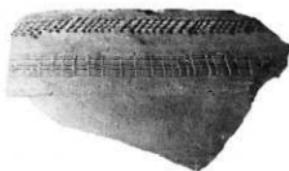
—



83

第5区(69)、他—第8区

圖版八
出土遺物



85



89



87



90



88



91

第9區

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく86						
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告86						
調書名	J跡部遺跡(第37次調査) II跡部遺跡(第38次調査) III跡部遺跡(第39次調査) IV池島・福万寺遺跡(第3次調査) V池島・福万寺遺跡(第4次調査) VI池島・福万寺遺跡(第5次調査) Ⅶ老原遺跡(第11次調査) Ⅷ恩智背遺跡(第16次調査) Ⅸ恩智背遺跡(第17次調査)						
番次							
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告86						
シリーズ番号	86						
編集者名	I・II 猪川一、III・V・VI 梅田清一、IV-VI 原田昌則、VII 西村公助						
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市寺町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所取遺跡	所存地	市町 村 遺跡番 号	度分 秒	度分 秒			
あじべやき 跡部遺跡 (第37次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市春日町2丁目地内	27212 64	34度36 分 48 秒	135度35分 45秒	20040722 ~ 20040930	18.25	公共 下水道
あじべやき 跡部遺跡 (第38次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市跡部南の町1丁目地内	27212 64	34度36 分 42 秒	135度35分 03秒	20041116 ~ 20050218	36	公共 下水道
あじべやき 跡部遺跡 (第39次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市北龜井町3丁目地内	27212 64	34度36 分 59 秒	135度35分 06秒	20050525 ~ 20050530	23	公共 下水道
いづしま・ふくしまいせき 跡部遺跡 (第3次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市上之島町3丁目、 福寺町南4丁目地内	27212 72	34度38 分 10 秒	135度37分 33秒	20041104 ~ 20041209	24	公共 下水道
いづしま・ふくしまいせき 跡部遺跡 (第4次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市上之島町北2丁目地内	27212 72	34度38 分 02 秒	135度37分 28秒	20050107 ~ 20050111	45.6	公共 下水道
いづしま・ふくしまいせき 跡部遺跡 (第5次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市福寺町南4丁目地内	27212 72	34度38 分 21 秒	135度37分 29秒	20050218 ~ 20050224	45.6	公共 下水道
あいほりやせき 老原遺跡	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市老原3・4丁目地内	27212 38	34度36 分 06 秒	135度36分 17秒	20050707 ~ 20050916	37.12	公共 下水道
あいほりやせき 恩智遺跡 (第16次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市恩智町1・3丁目、 恩智南町1丁目地内	27212 30	34度36 分 12 秒	135度37分 49秒	20050401 ~ 20050601	32	公共 下水道
あいほりやせき 恩智遺跡 (第17次調査)	おおさかやせきしきわらちくさとうめのない 大阪府八尾市恩智中町3丁目	27212 30	34度36 分 14 秒	135度37分 58秒	20050601 ~ 20050810	44	公共 下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 (第37次調査)	居住域 墓域	弥生時代前期～後期	地層	-	
	墓域	古墳時代初頭～中期	地層		
	居住域	古墳時代後期～奈良時代	北層		
	生産域	平安時代～現代	北層		
跡部遺跡 (第38次調査)	集落	弥生時代中期以降	河川堆積層	須恵器	
跡部遺跡 (第39次調査)	生産域	平安時代以降	土坑	用逆不明木製品	
池島・福方寺遺跡 (第3次調査)	集落	鍾倉時代末期	河川氾濫層	土師器・須恵器	
池島・福方寺遺跡 (第4次調査)	集落	鍾倉時代末期	河川氾濫層	-	
池島・福万寺遺跡 (第5次調査)	集落	中世	河川堆積層	-	
老原遺跡 (第11次調査)	集落		河川堆積層	-	
恩智遺跡 (第16次調査)	集落	弥生時代～近世	河川堆積層	弥生土器	
恩智遺跡 (第17次調査)	集落	绳文時代晚期～近世	地層	縄文土器・弥生土器・古式土器・陶磁器・瓦・石器	「天王の森」付近で、縄文時代晚期の地層と土器を検出。

財団法人八尾市文化財調査研究会報告86

- I 跡部遺跡（第37次調査）
- II 跡部遺跡（第38次調査）
- III 跡部遺跡（第39次調査）
- IV 池島・福万寺遺跡（第3次調査）
- V 池島・福万寺遺跡（第4次調査）
- VI 池島・福万寺遺跡（第5次調査）
- VII 老原遺跡（第11次調査）
- VIII 恩智遺跡（第16次調査）
- IX 恩智遺跡（第17次調査）

発行
編集 平成18年3月
財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 摂近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
国版 ニューエイジ <70Kg>

